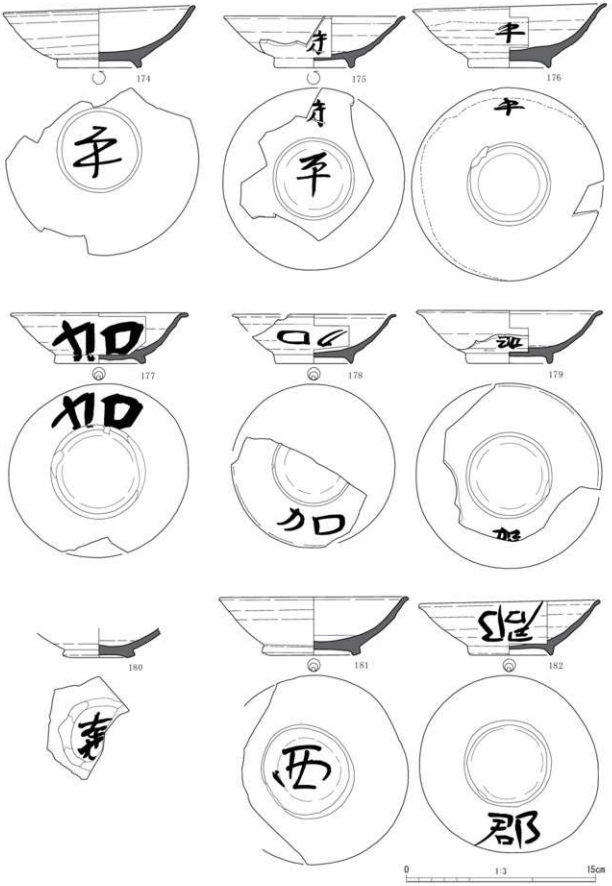

Fig. 185　SX01 西部　出土遺物（19）

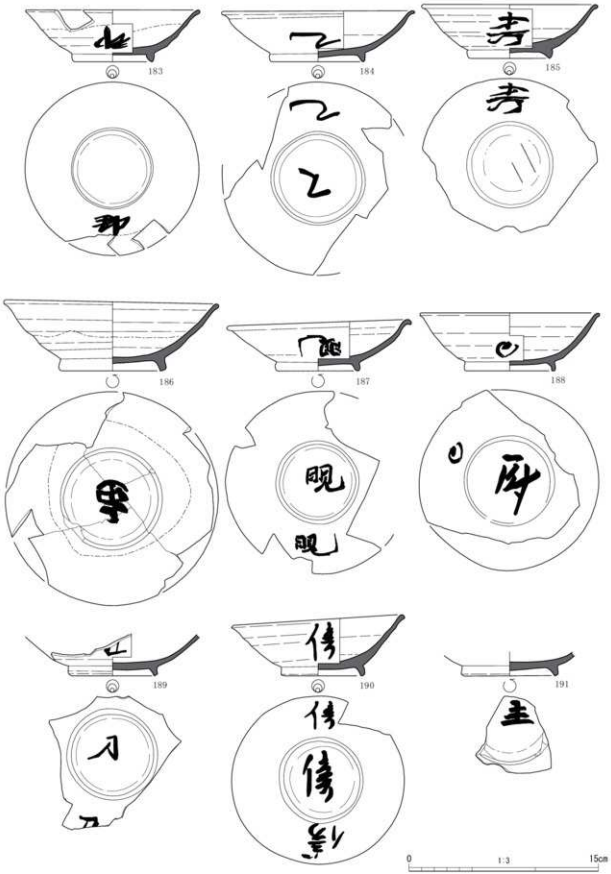

Fig.186　SX01 西部　出土遺物（20）

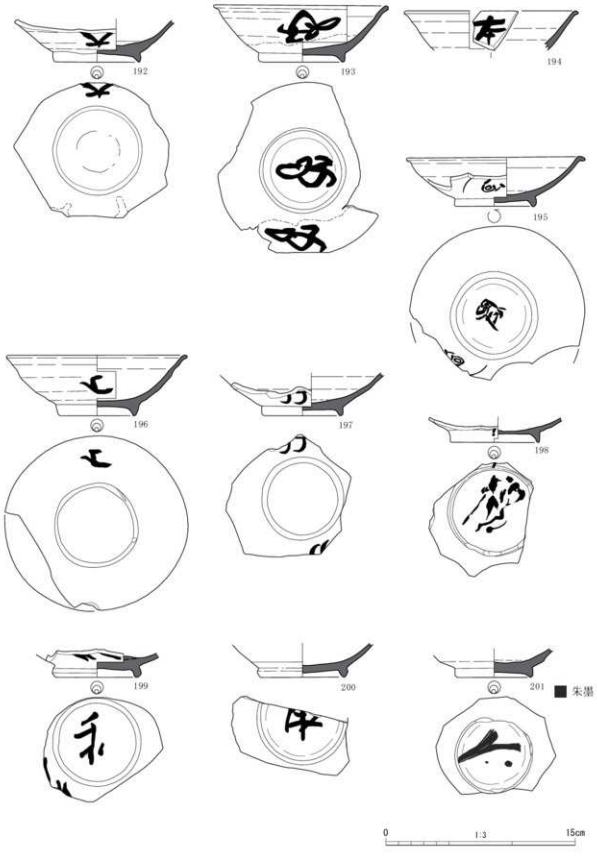

Fig.187　SX01 西部　出土遺物（21）

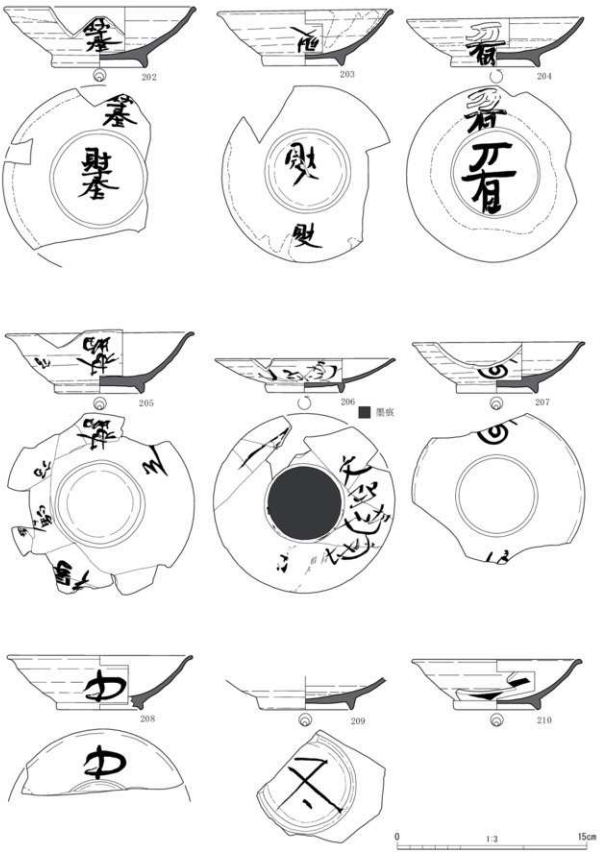

Fig. 188　SX01 西部　出土遺物（22）

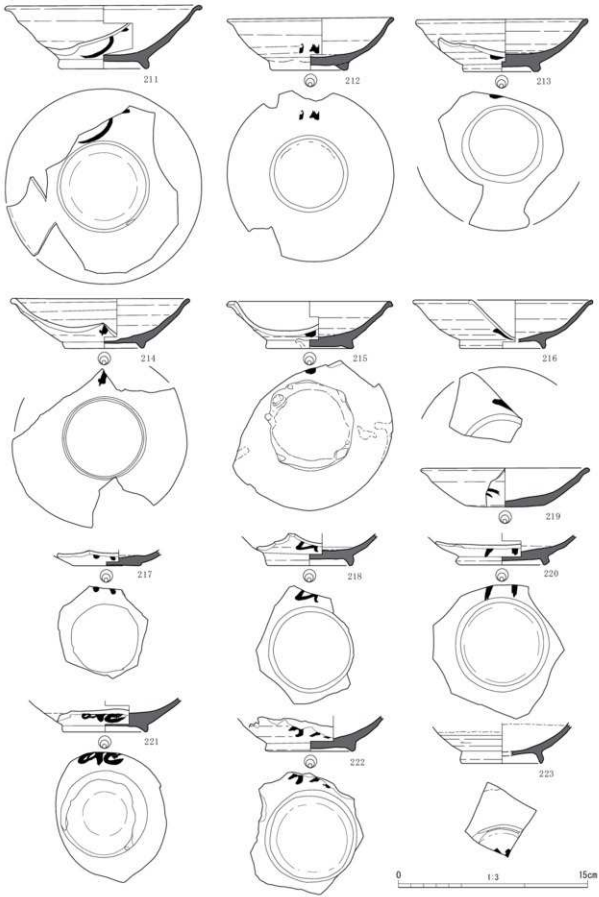

Fig. 189　SX01 西部　出土遺物（23）

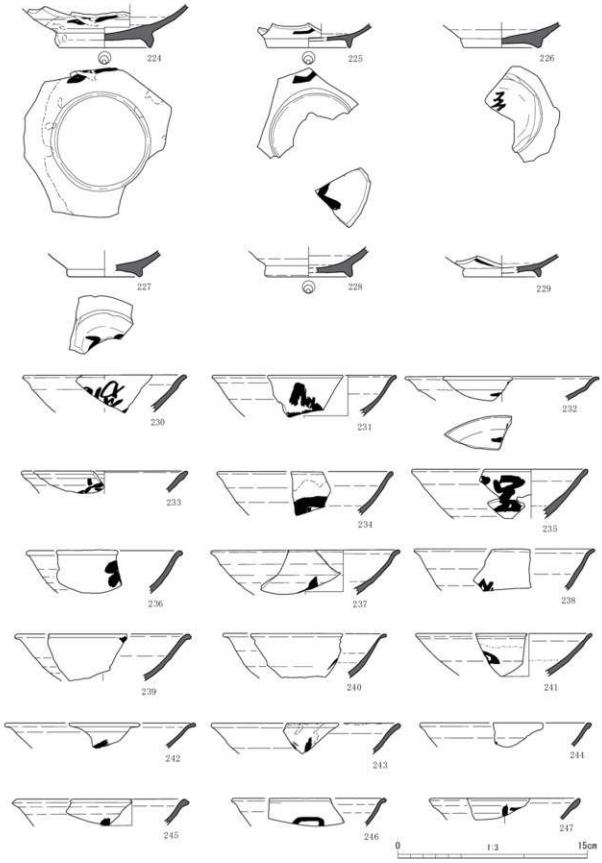

Fig.190　SX01 西部　出土遺物（24）

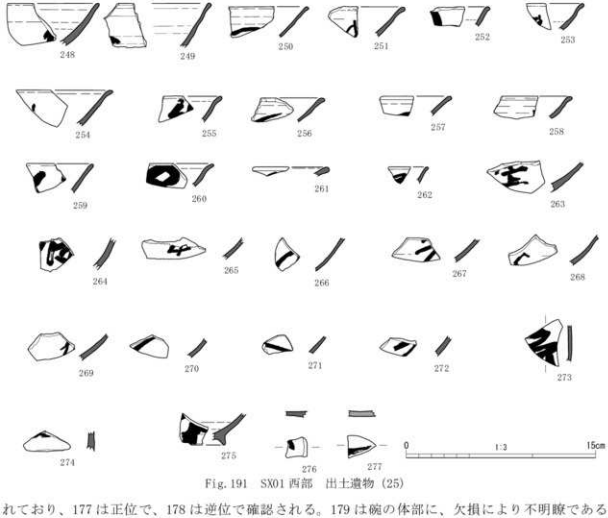

Fig. 191　SX01 西部　出土遺物（25）

れており、177 は正位で、178 は逆位で確認される。179 は碗の体部に、欠損により不明瞭であるが「賀」と考えられる文字が記されている。180 は碗の底部に、欠損により不明瞭であるが「本加」と考えられる文字が記されている。181 は碗の底部に「西」が記されている。182・183 は碗の体部に逆位で「郡」が記されている。184 は碗の体部及び底部に「乙」が記されている。185 は碗の体部に墨書が確認されるが判読できない。186 は碗の底部に「甲」が記されている。187 は碗の体部及び底部に「睨」が記されている。188 は底部に「厨」の文字のほか、体部に円状の記号が記されている。189 は碗の体部及び底部に「刀」が記されている。190 は碗の体部の 2 箇所及び底部に「傍」が記されている。191 は碗の底部に「主」が記されている。192 は碗の体部に「大」が記されている。193 は碗の体部及び底部に「好」と考えられる文字が記されている。194 は体部に「本」が記されている。195 ～ 201 は墨書と考えられるが文字の判読ができなかった土器を示す。201 は朱墨書で記されている。

202 は碗の体部及び底部に「財基」が記されている。203 は体部及び底部に「財入」が記されている。204 は体部及び底部に「刀有」が記されている。205・206 は習書の文字が確認される。205 は碗の体部に「三」「得」が確認される。欠損により不明瞭であるが「□□駒」、判読が困難な文字や、一部判読できる「□物」が記されている。206 は皿の体部に「文」「正」「也」「地」「地」習書の文字が記されており、底部全面に墨痕が確認される。207 ～ 209 は碗に記号が記されている。207 は

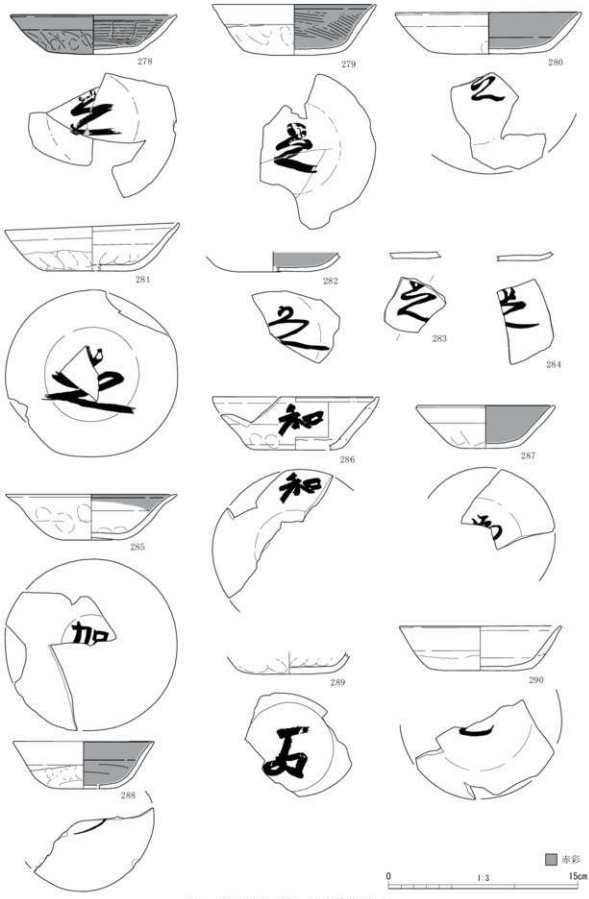

Fig.192　SX01 西部　出土遺物（26）

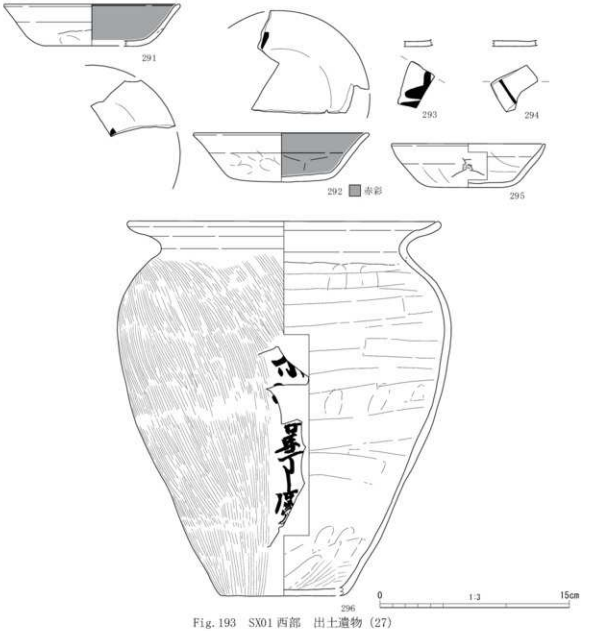

Fig. 193　SX01 西部　出土遺物（27）

体部に渦巻状の記号が、208 はD字状の記号が、209 は又の下部に点のある記号が確認される。210 ～ 277 は墨書と考えられるが文字の判読はできなかった土器を示す。230 の文字の判読は難しいが 2 文字と考えると 2 文字目は「加」の可能性がある。

278 ～ 296 は土師器に墨書が記されている。278 ～ 284 は坏の底部に「足」が記されている。285 は欠損により不明瞭であるが坏の底部に「賀」と考えられる文字が記されている。286 は坏の体部に「和」が記されている。287・290 は坏の底部に欠損により不明瞭であるが「足」と考えられる文字が記されている。289 は坏の底部に「石」と考えられる文字が記されている。291 ～ 294 は文字は確認できるが判読できなかった。295 は坏の体部に焼成後に刻書されたと考えられる「貞」が記されている。296 は甕の体部に墨書が記されている。欠損によりすべて判読できないが「□□□万呂□□」と記されている。

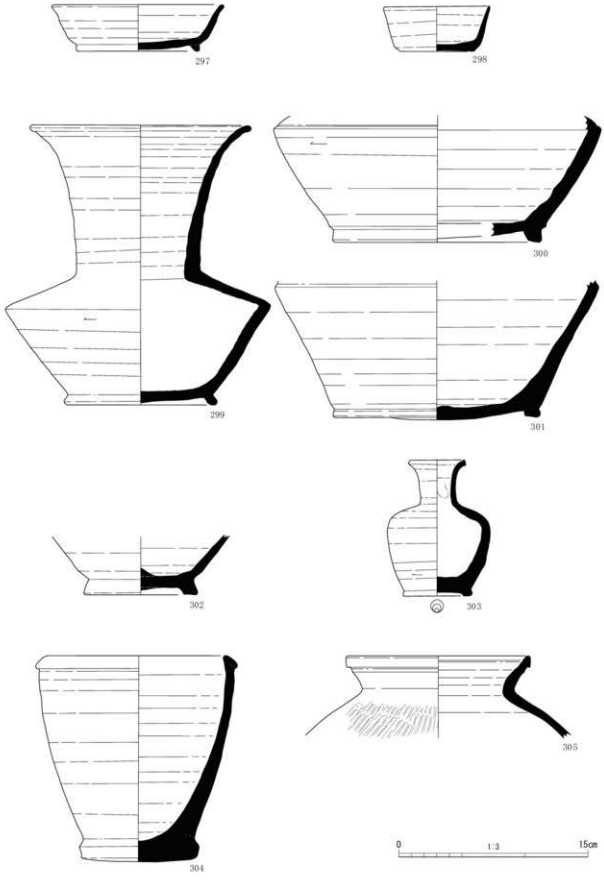

Fig.194　SX01 西部　出土遺物（28）

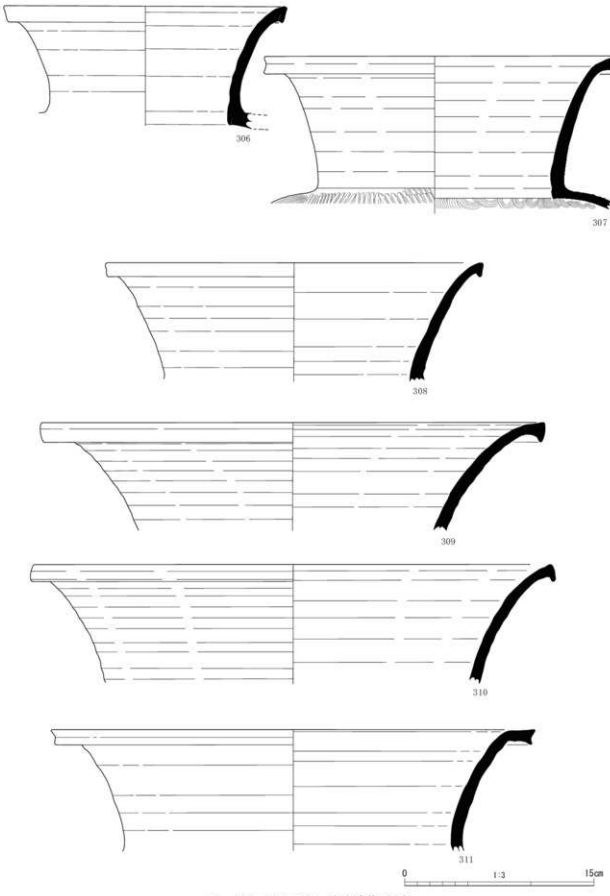

Fig. 195　SX01 西部　出土遺物（29）

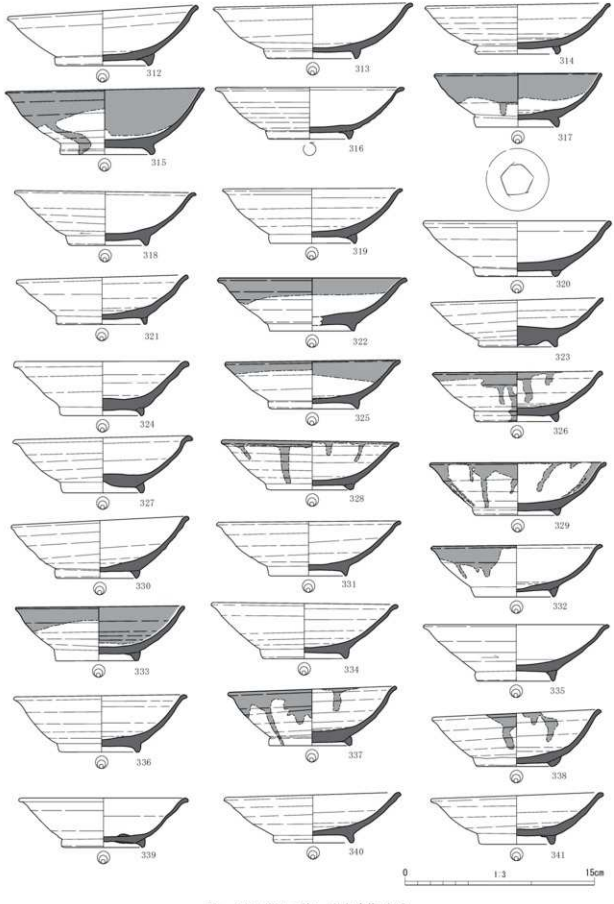

Fig.196　SX01 西部　出土遺物（30）

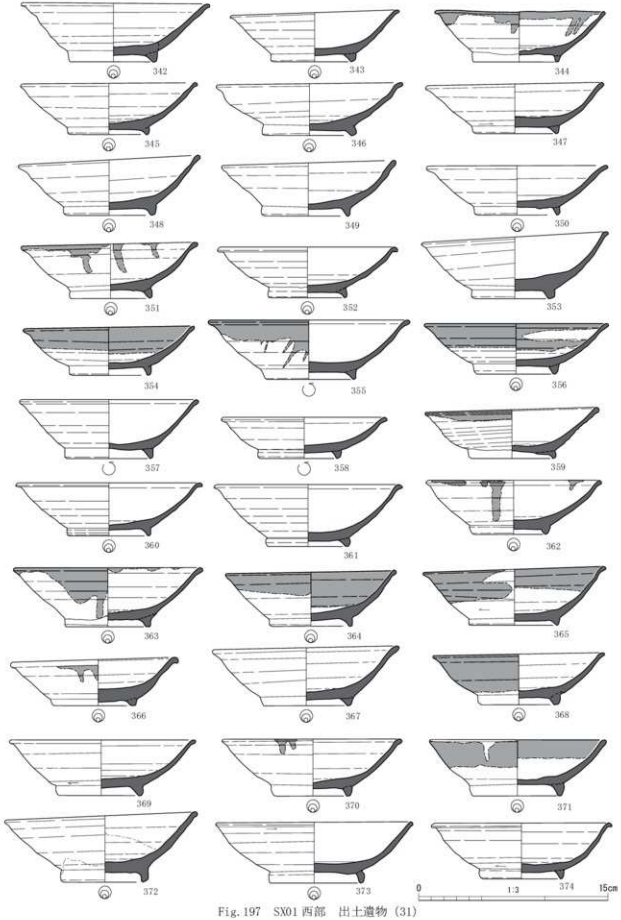

Fig. 197　SX01 西部　出土遺物（31）

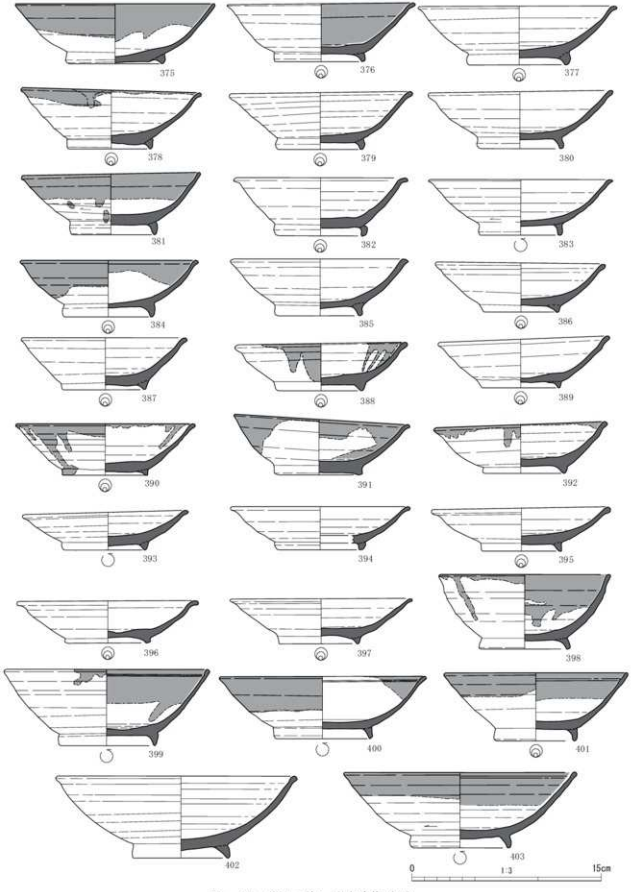

Fig.198　SX01 西部　出土遺物（32）

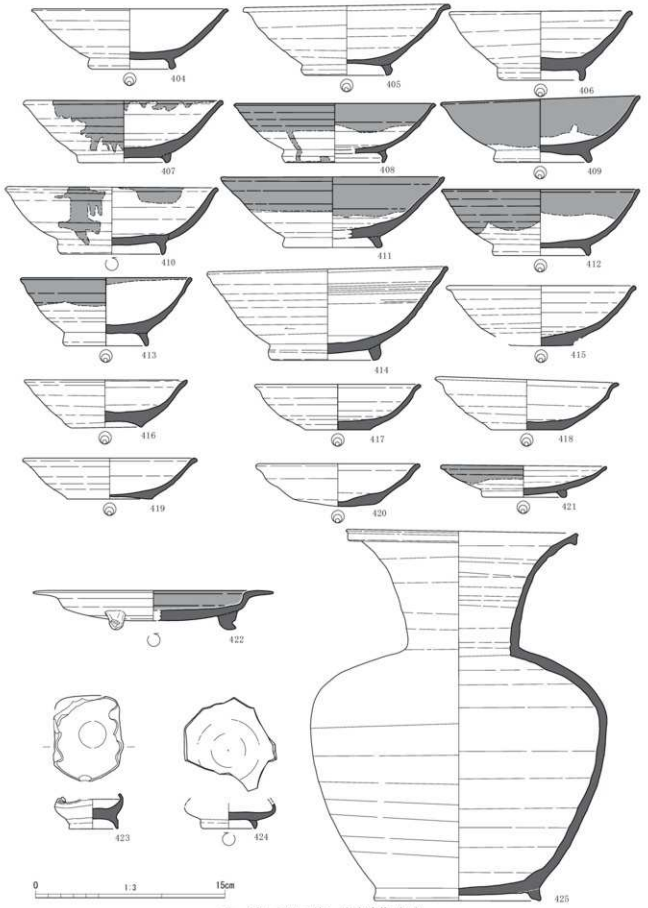

Fig. 199　SX01 西部　出土遺物（33）

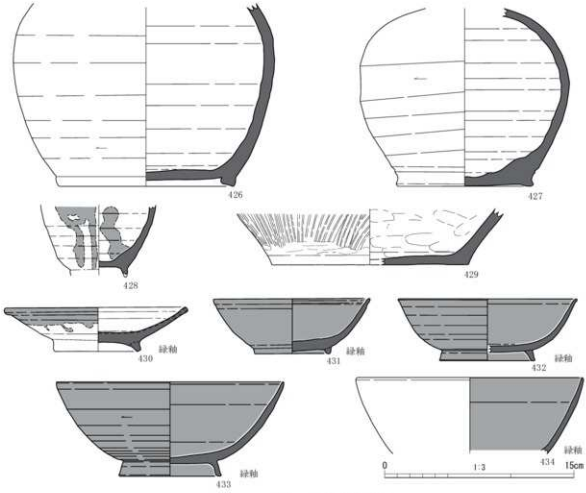

Fig. 200　SX01 西部　出土遺物（34）

須恵器（Fig. 194・195）SX01 から出土した須恵器を示す。器種は、有台坏身、箱坏、壺類、陶臼、甕が出土している。灰釉陶器や土師器と比較して出土点数は少ない。

297 は有台坏身である。298 は箱坏である。299 ～ 303 は壺類を示す。299 は広口壺である。肩部が鋭く屈曲する形状である。300・301 は肩部から上部が欠損している。肩部の形状から広口壺と考えられる。301 は底部が高台より突出した形状である。303 は小型の長脛壺である。底部に糸切痕が残る。304 は陶臼である。底部には穿孔はみられない。305 ～ 311 は甕である。305 は上半のみ残存しており、外面体部にタタキ調整が施される。307 は体部がわずかに残存している。外面にタタキ調整が、内面には同心円状の当て具痕が確認される。306 ～ 311 は甕の口縁部である。

灰釉陶器（Fig. 196 ～ 200）SX01 から出土した 312 ～ 429 を示す。出土したほとんどが碗であり、他にも皿、壺類、甕など出土している。

312 ～ 415 は碗である。施釉がなされていない個体が多い。高台の断面形状や、施釉方法、底部の調整などからⅦ－２～Ⅷ－１期（９世紀後半～ 10 世紀前半）に比定すると考えられる。底部の調整痕には糸切、ヘラケズリ、ナデが確認されており、糸切が多い。高台は三日月高台や三角形状の形状が確認されており、高台貼付けのナデが弱い三角形状の高台が比較的多い。施釉方法にはハケヌリとツケガケが確認されるが、無釉が半数近くを占める。317 は底部に六角形状の記号が刻ま

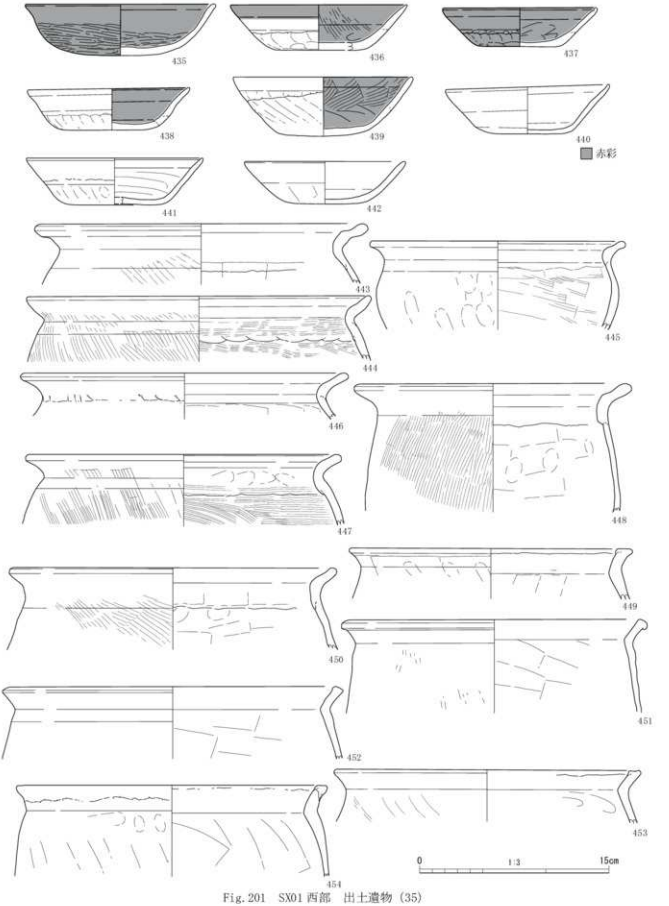

Fig. 201　SX01 西部　出土遺物（35）

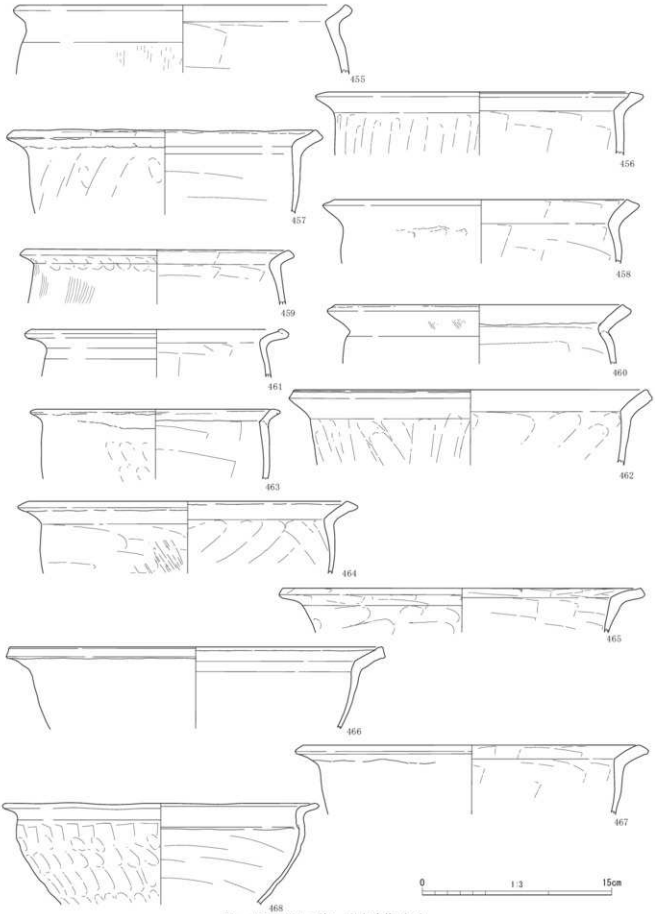

Fig.202　SX01 西部　出土遺物（36）

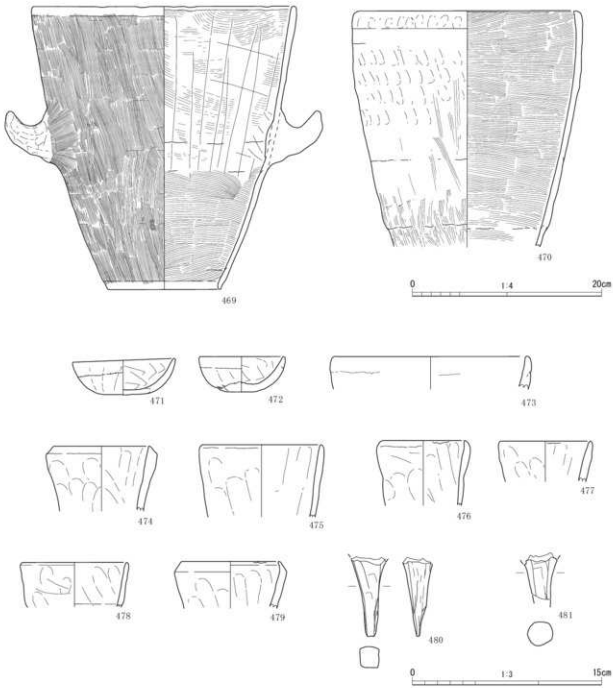

Fig. 203　SX01 西部　出土遺物（37）

れている。415 は高台が欠損により有無が不明瞭であるが、欠損状況により有台の碗と考えられる。416 ～ 420 は糸切未調整の無台碗である。421 は皿である。底部には糸切痕が確認される。422 は獣足皿である。423・424 は耳皿である。423 の耳部は波状であるが 424 は欠損により不明である。

425 ～ 428 は壺類である。425 は長頸壺で肩部の張り出しは弱い。426・427 は体部上半から口縁部にかけて欠損しているが、残存部の形状から長頸壺と考えられる。428 は小型の壺で体部上半が欠損により不明である。429 は甕の底部から体部にかけての一部である。外面体部にタタキ調整がなされており、内面にナデ調整が確認される。430 ～ 434 は緑釉陶器である。

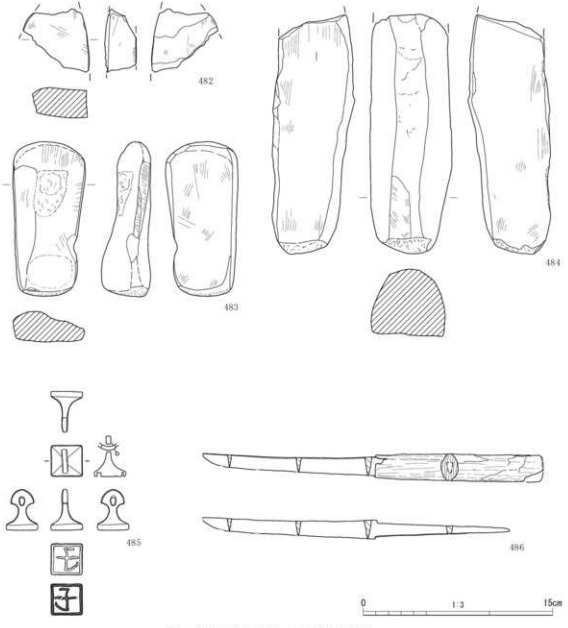

Fig. 204　SX01 西部　出土遺物（38）

土師器（Fig. 201 ～ 203）SX01 の西部より出土した 435 ～ 481 を示す。機種は坏や甕が多く、甑や小型模造品、製塩土器が出土している。

435 ～ 442 は坏である。435 は内外面に赤彩が施されており、内外面ともにミガキ調整が確認される。436 は内面と外面の口縁部に、437 は内外面ともに赤彩が施される。438・439 は内面に赤彩が施される。

443 ～ 468 は甕である。ほとんどが口縁部のみであるが、長胴甕のほかに短胴形態の甕も存在する。465 ～ 468 は肩部の張りがなく、底部に向かうに連れ径が短くなることから短胴形態の甕と考えられる。469・470 は甑である。470 は、外面は指ナデ、内面はハケメ調整がなされており、把手の痕跡が確認されない。完形で出土しておらず、全体像は不明瞭であるが把手がない形態と推定した。

471・472 は小型模造品の碗である。473 は製塩土器で、内面に布目痕が確認される。474 ～ 481

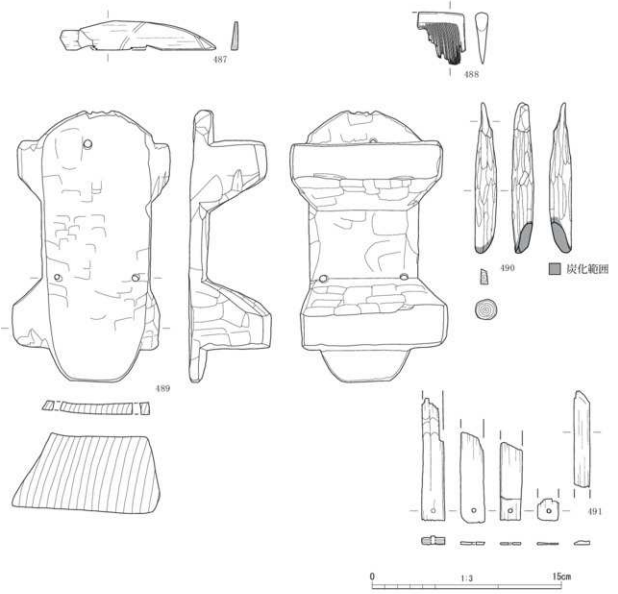

Fig. 205　SX01 西部　出土遺物（39）

は製塩土器である。口縁部の先端が丸みを帯びるものと尖るものが確認される。480・481 は製塩土器の脚部である。

石製品（Fig. 204）SX01 西部より出土した 3 点を図示する。482 は凝灰岩製の砥石である。上下部が欠損している。483 は凝灰岩製の磨面と敲打痕が確認される磨石である。484 は片麻岩と推定される石材に 4 面の磨面が確認される磨石である。

金属製品（Fig. 204）SX01 西部では 2 点図示する。485 は銅製の印鑑である。印面は方形で鈕は扇状の形状である。鈕の中央に穿孔がなされ、金属製の輪の一部が残存している。印面には「子」が反転した文字がみられる。486 は刀子で、木製の柄が残存して出土している。

木製品（Fig. 205 ～ 207）SX01 西部より出土した 487 ～ 504 を示す。器種は、櫛、下駄、曲物、挽物皿、杭のほか加工材が出土している。

487 は馬形の可能性がある加工板である。下部に 2 箇所抉りが確認される。488 は横櫛である。

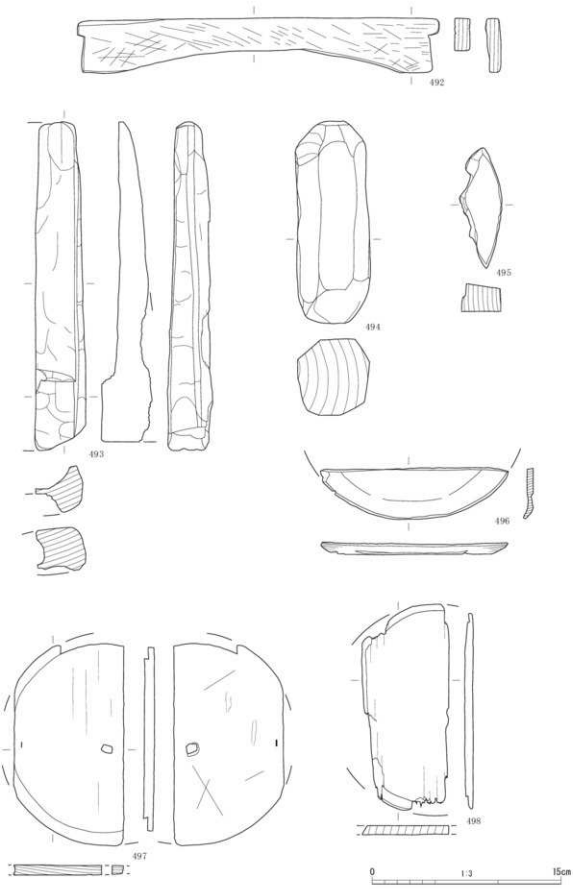

Fig.206　SX01 西部　出土遺物（40）

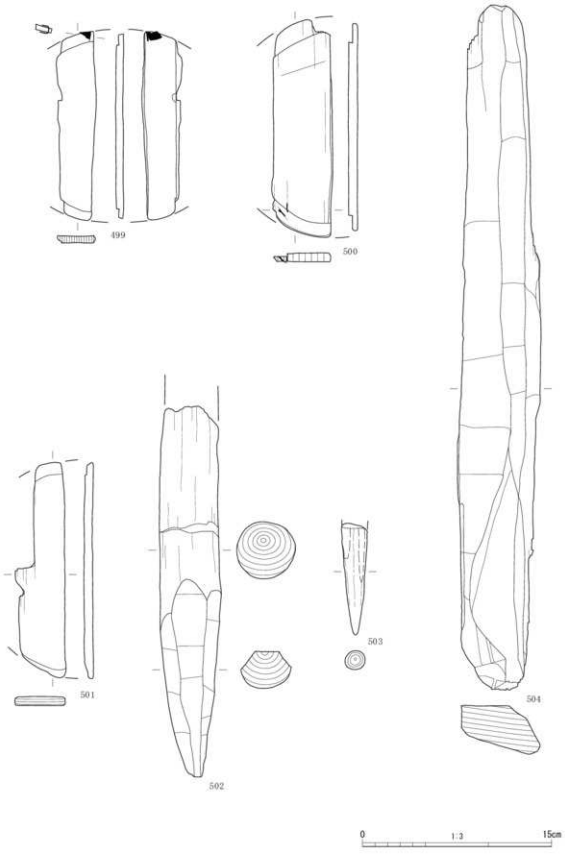

Fig. 207　SX01 西部　出土遺物（41）

およそ半分が欠損している。489は連歯下駄である。上面に使用による摩耗が確認されるが、歯はほとんど擦り減っておらず、使用途中に廃棄された可能性がある。490は弓の一部と推定される加工棒で、下部が欠損しており、全体像は不明であるが、丁寧な加工と上部の形状から弓の弦輪をかける弭と推定される。491は用途不明の木製品である。出土時、形状の同じ薄板が重ね合わせて下部に木釘で止められて出土していた。扇の要部分の可能性もある。492は台脚と考えられる部材である。片面に刃物傷が複数確認され、二次利用されていたと考えられる。493～495は用途不明の木製品である。494は多角形状に加工されており、中央全周を抉る形態の木錘の未成品と考えられる。496は挽物皿である。497～501は曲物の底板である。497は中央に穿孔が確認される。502・503は杭である。504は用途不明の加工板である。

②SX01 中央部

墨書土器（Fig. 208～233）SX01西部と同じく須恵器、灰釉陶器、土師器ごとに分け、文字でまとめて遺物を掲載している。ほとんどが1文字書きされた墨書土器であり、「得」、「足」が多数を占める。1文字書きの墨書土器より少数であるが、「得上」などの2文字書きの墨書土器も多数出土している。

505～510は須恵器に墨書が記されている。505は無台碗の底部に「川辺足人」が記されてるほか、判読はできないが1文字確認される。506は糸切碗の底部に「太」が記されている。507は糸切皿の底部に「足」が記されている。508・509は有台碗で、508は体部、509は底部に「足」が記されている。510は糸切碗で底部に「足」が記されている。

512～781は灰釉陶器に墨書が記されている。512～544は碗の体部に「得」が記されている。ただし、522のみ「得上」が記されていた。544は高台がほかと比較して高く、托に近い形状である。545・546は碗の体部に朱墨で「得」が記されている。547は皿の体部と底部の2箇所に朱墨で「得」が、体部1箇所に墨書で「得」が記されている。548～550は「得」のほか、別の文字が確認される。548は体部に「得」、底部に「上」が記されている。549は体部に「得」のほか、判読できない1文字が記されている。550は体部、底部に「得」が、「平」と考えられる文字が体部に記されている。551・552は無台碗で、体部に「得」が記されており、552は朱墨で記されている。553～558は灰釉陶器の破片に「得」の文字が確認できる。561～562は「得」と考えられる文字が記されている。

563～587は碗に「得上」が墨書で記されている。572は「上」が鏡文字で記されている。578は体部と底部に「得上」が記されている。586・587は皿の体部に「得上」が記されており、586は輪花皿である。588～592は欠損により不明瞭であるが、「得上」が記されていると考えられる。593～595は「上」が記されている。593・594は輪花碗で、594は施釉の上に墨書が記されていた可能性があり、本調査では「得上」が多数出土していることから「得上」と推定することができる。595も同じく、欠損により不明であるが「得上」と推定できる。596～620は碗の体部に「足」が、621～624は碗の底部に「足」が記されている。625～630は「足」2文字、あるいは別の文字が記されている。625は碗の体部に「足」が2文字記されている。626～629は碗の体部及び底部に「足」が記されている。そのうち、626・627は体部の「足」が逆位で記されている。630は碗の体部に朱墨で「足」が、底部に「升」が記されている。631～633は碗の体部に朱墨で「足」が記さ

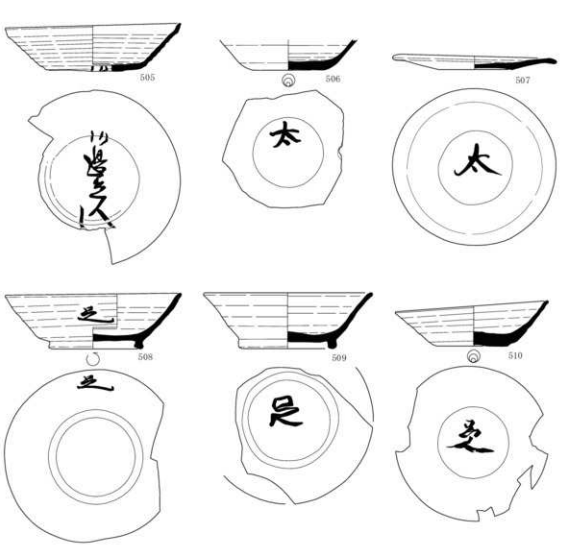

Fig. 208　SX01 中央部　出土遺物（1）

れている。634 は皿の体部に「足」が記されている。635・636 は無台碗で、635 は体部、636 は底部に「足」が記されている。637 ～ 643 は欠損により不明瞭であるが「足」と記されている可能性がある。642・643 は朱墨で記されている。645 ～ 647 は碗の体部及び底部に「朋万」が記されている。648 は碗の体部に「朋万」のほか「足」が記されている。649 は碗の体部に朱墨で「足」のほか体部及び底部に「朋万」と推定される文字が記されている。

650 は碗の体部及び底部に「水万」が記されている。651・652 は碗の体部に「孕」が記されている。653 ～ 660 は碗に「和」が記されている。653 は内面全体に朱墨痕が確認される。654 は体部の文字は欠損により判読できない。655 ～ 658 は体部及び底部に「和」が記されている。そのうち、658 は体部、底部ともに朱墨で記されている。661 ～ 663 は碗に「仁」が記されている。661・662

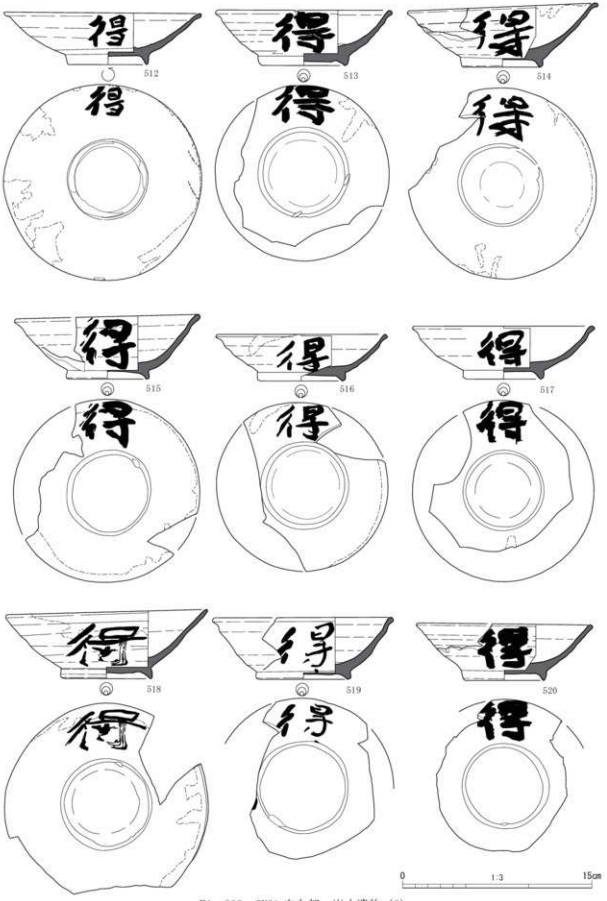

Fig. 209　SX01 中央部　出土遺物（2）

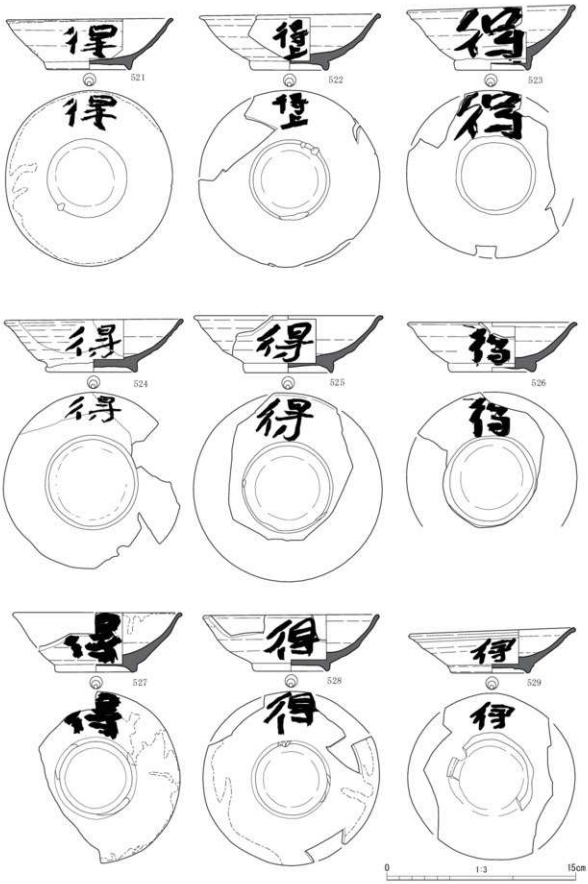

Fig. 210　SX01 中央部　出土遺物 (3)

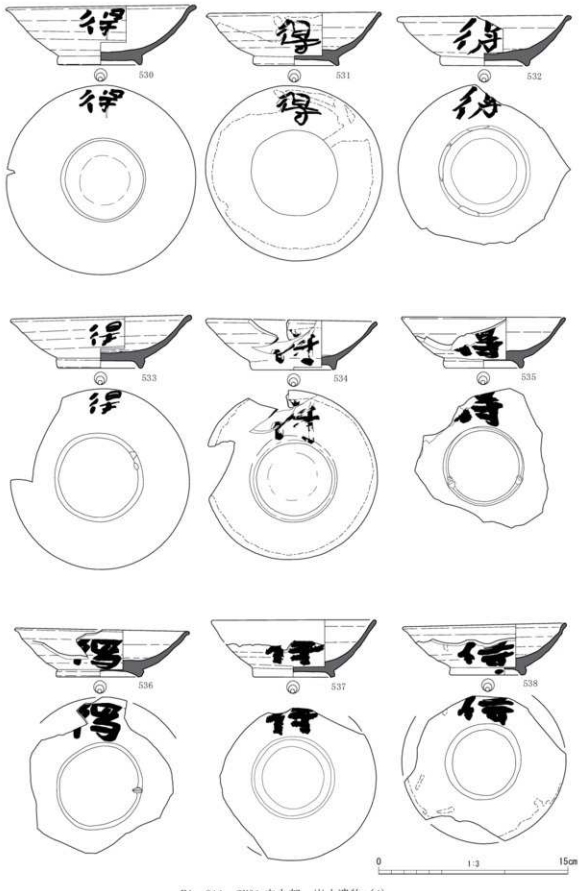

Fig. 211　SX01 中央部　出土遺物（4）

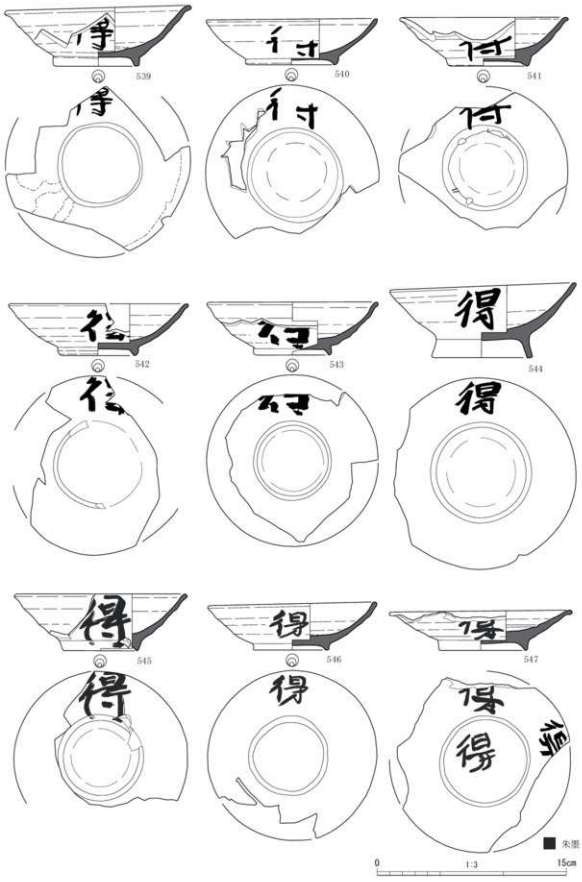

Fig. 212　SX01 中央部　出土遺物（5）

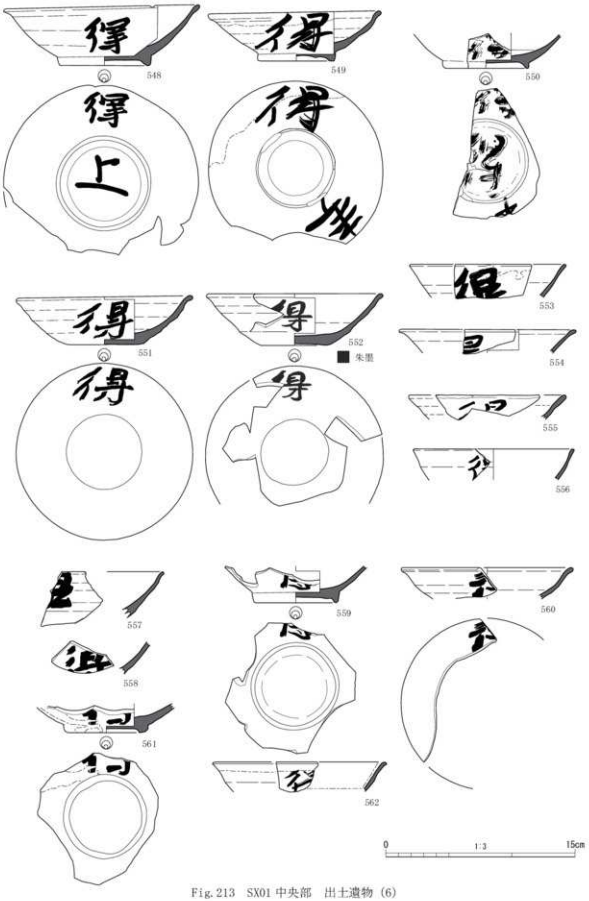

Fig. 213　SX01 中央部　出土遺物（6）

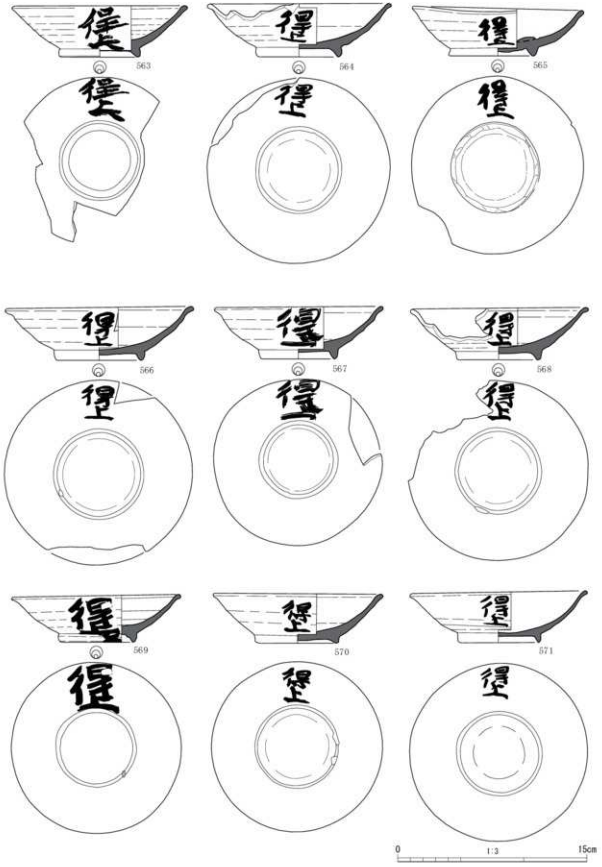

Fig. 214　SX01 中央部　出土遺物（7）

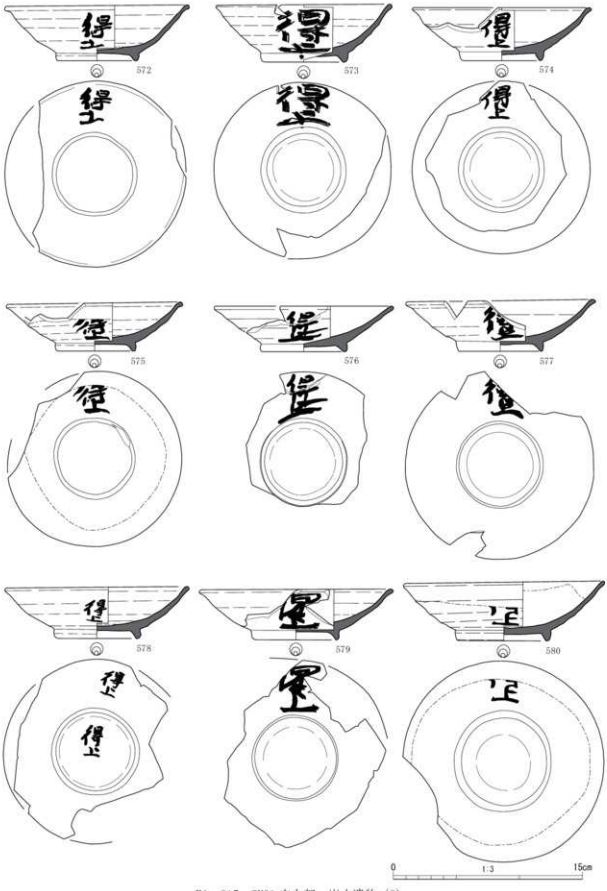

Fig. 215　SX01 中央部　出土遺物（8）

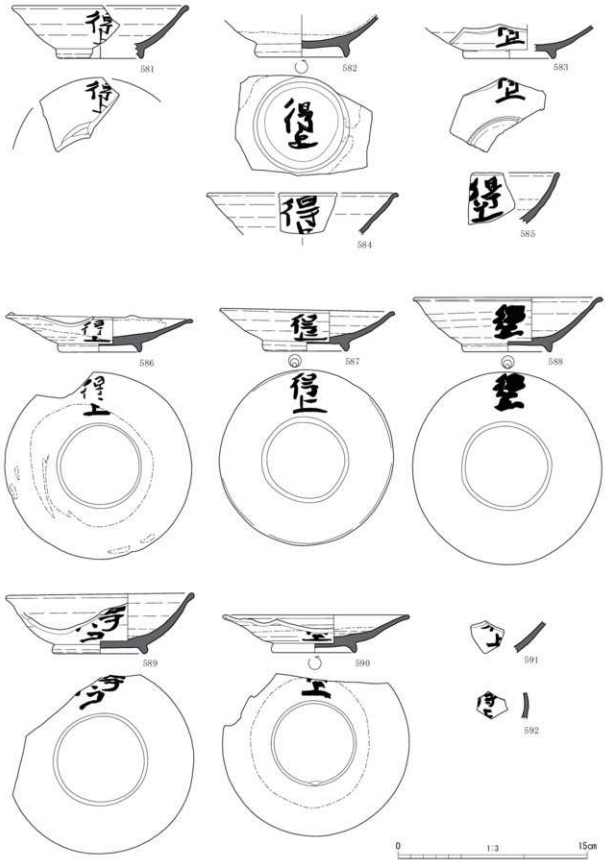

Fig. 216　SX01 中央部　出土遺物（9）

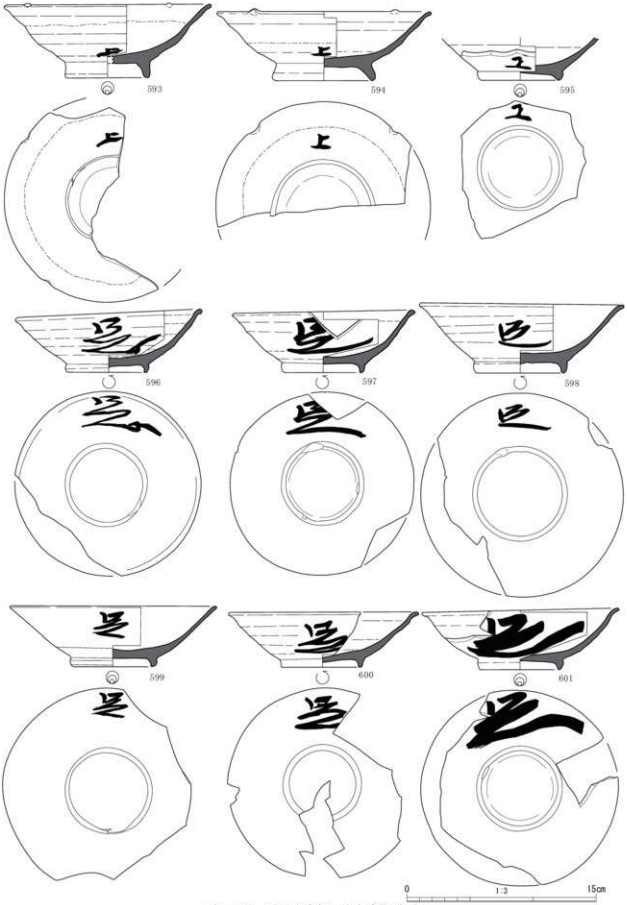

Fig. 217　SX01 中央部　出土遺物（10）

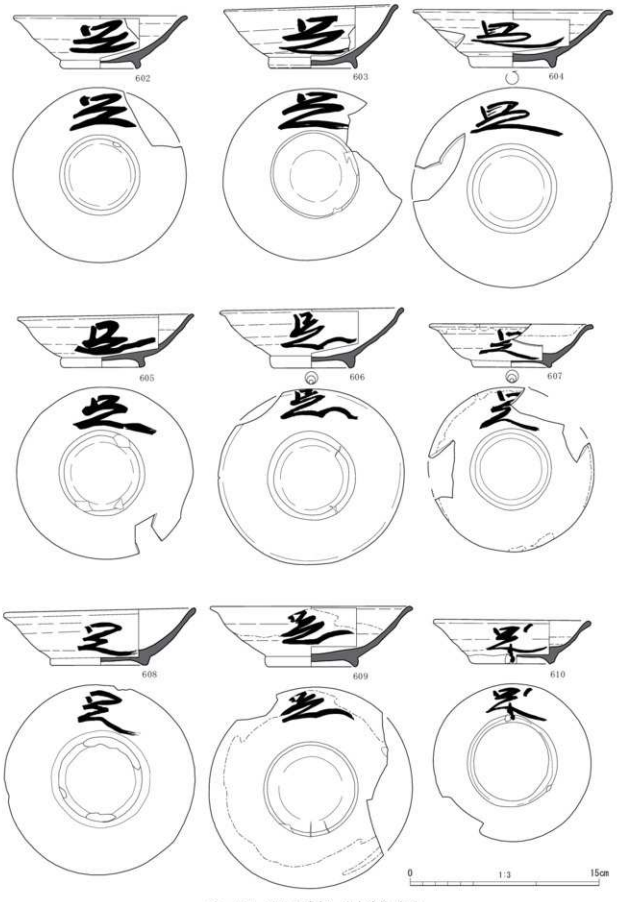

Fig. 218　SX01 中央部　出土遺物（11）

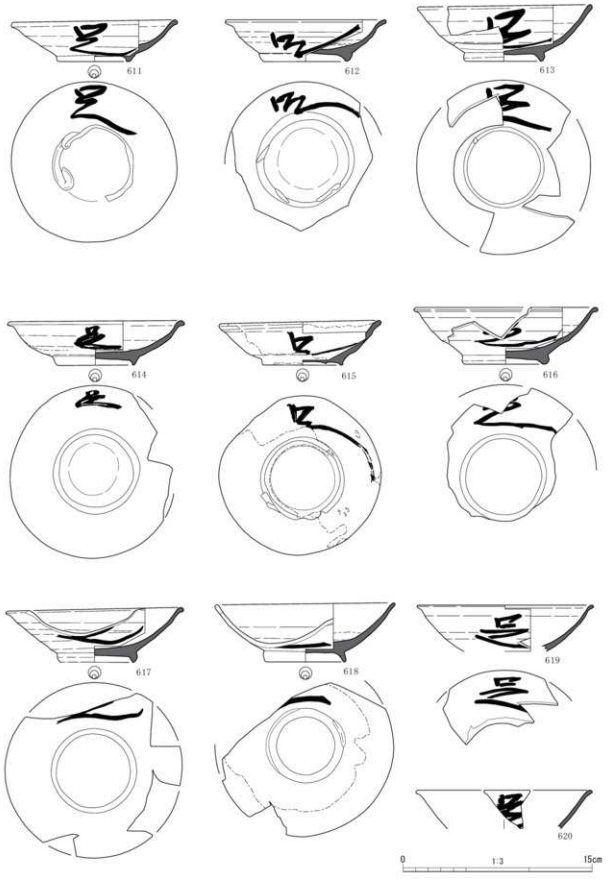

Fig.219　SX01 中央部　出土遺物（12）

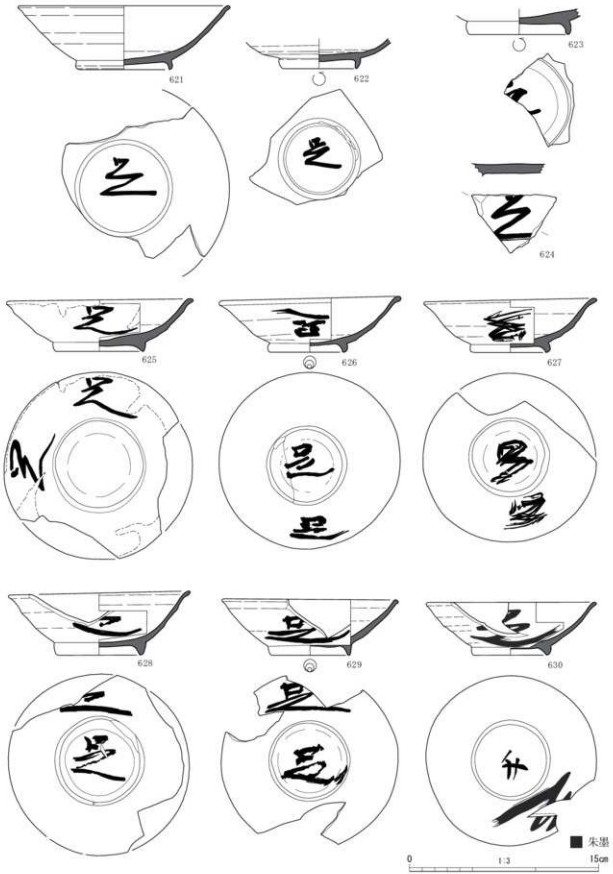

Fig. 220　SX01 中央部　出土遺物（13）

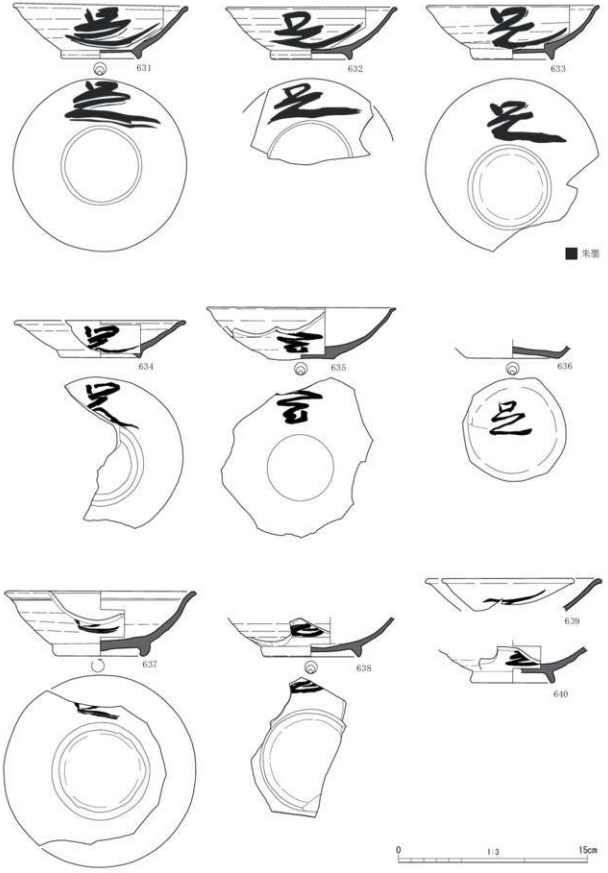

Fig. 221　SX01 中央部　出土遺物（14）

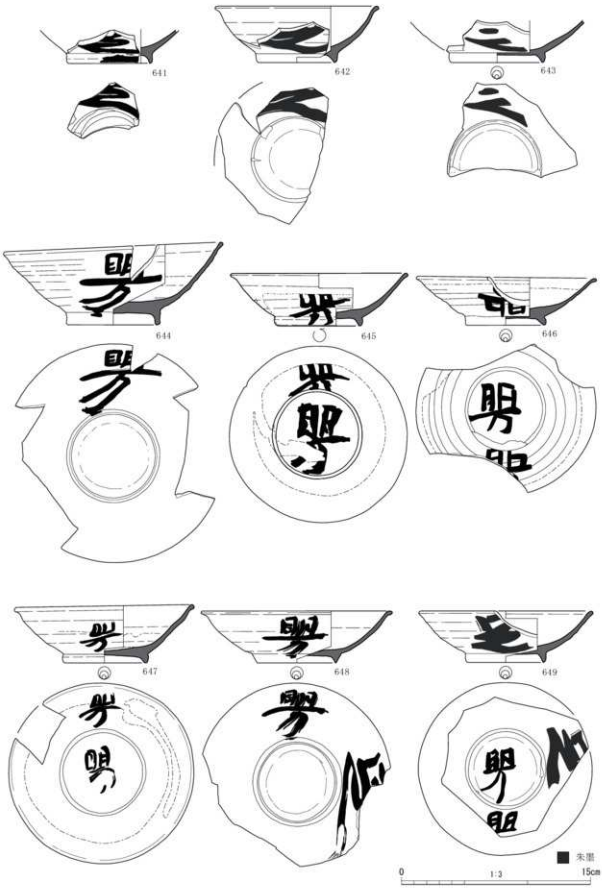

Fig. 222　SX01 中央部　出土遺物（15）

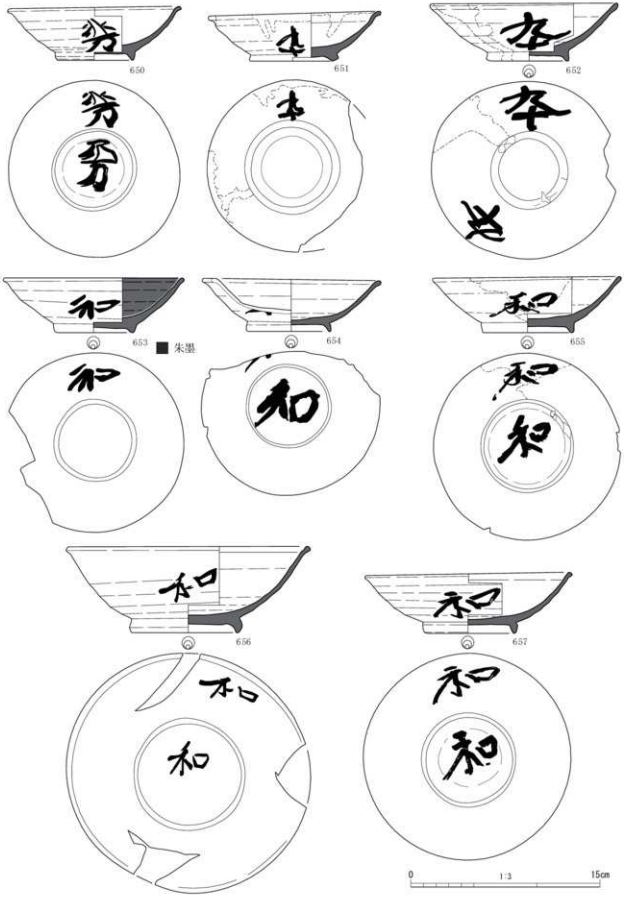

Fig.223　SX01 中央部　出土遺物（16）

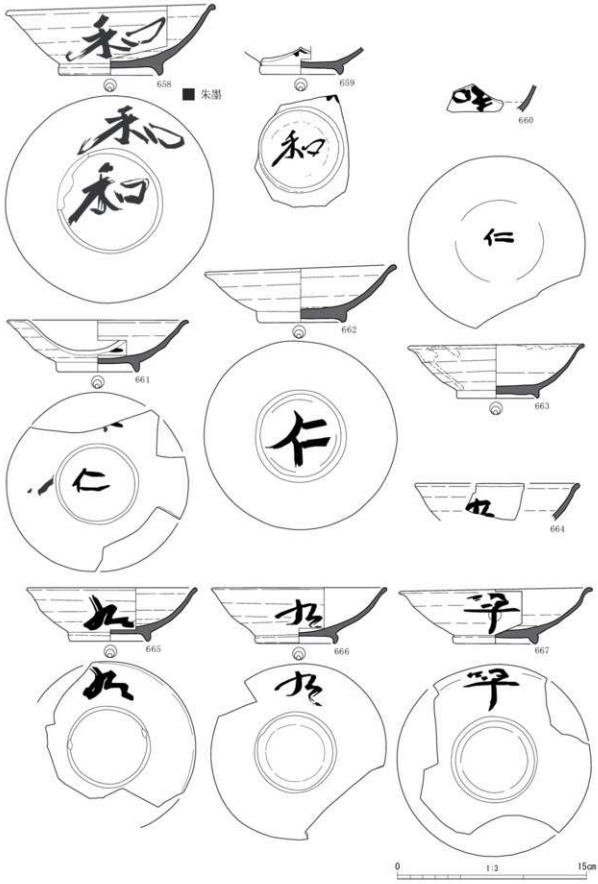

Fig. 224　SX01 中央部　出土遺物（17）

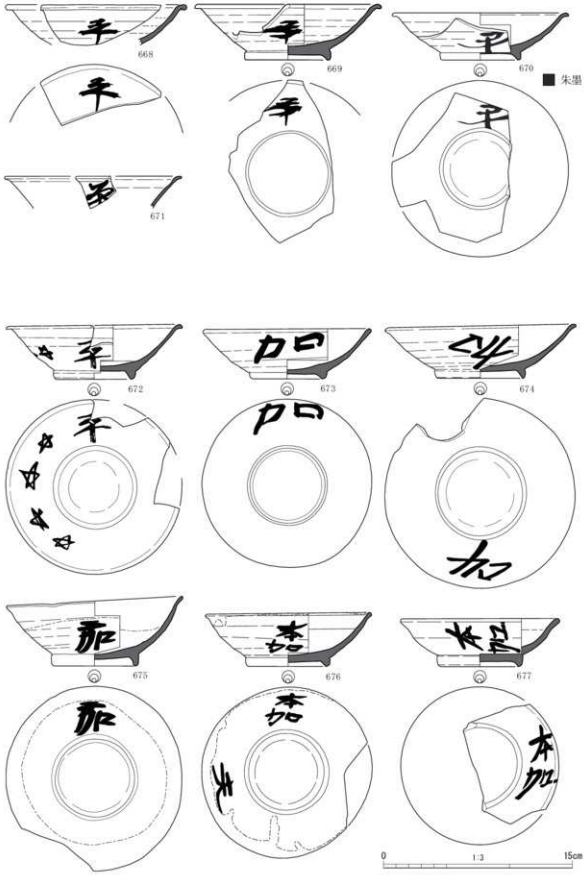

Fig. 225　SX01 中央部　出土遺物（18）

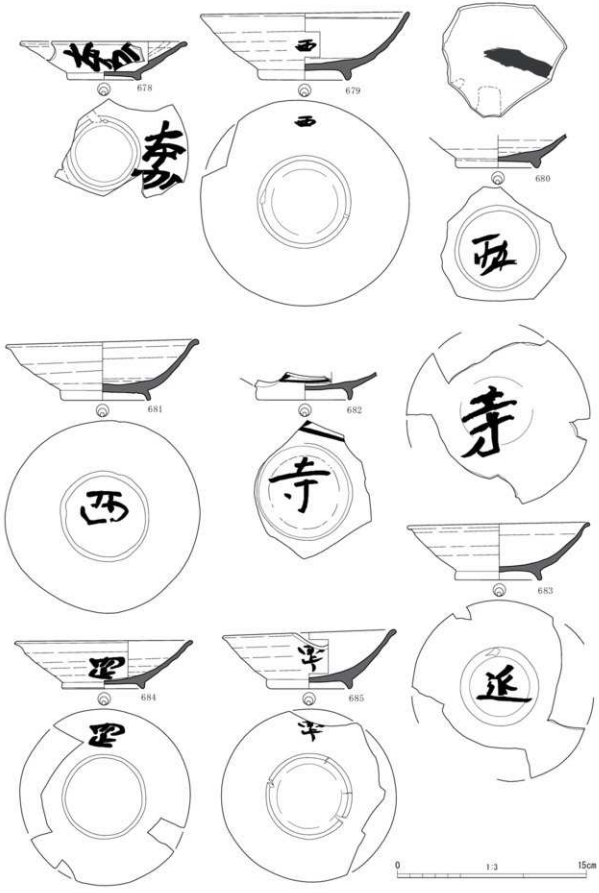

Fig. 226　SX01 中央部　出土遺物（19）

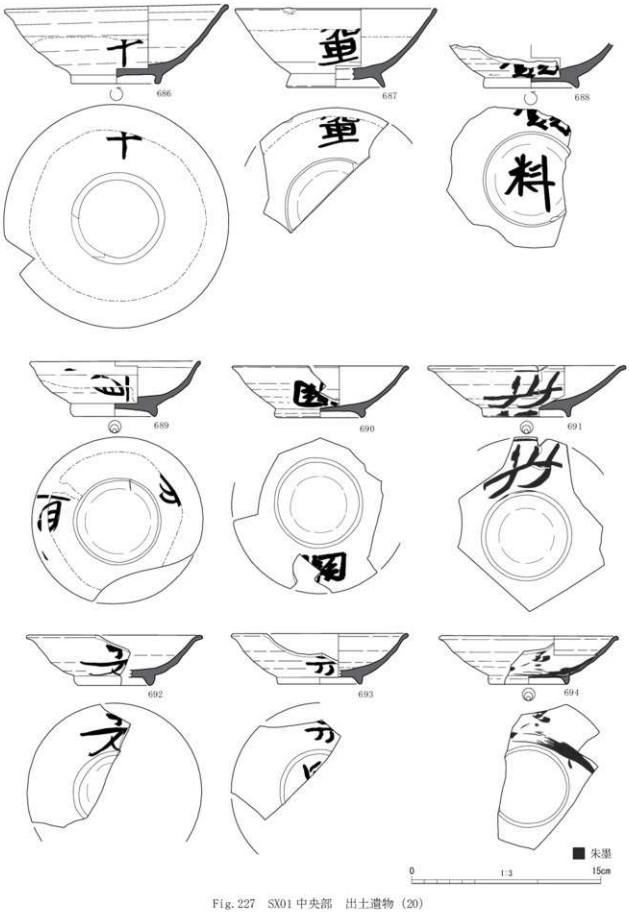

Fig.227　SX01 中央部　出土遺物（20）

Fig. 228　SX01 中央部　出土遺物（21）

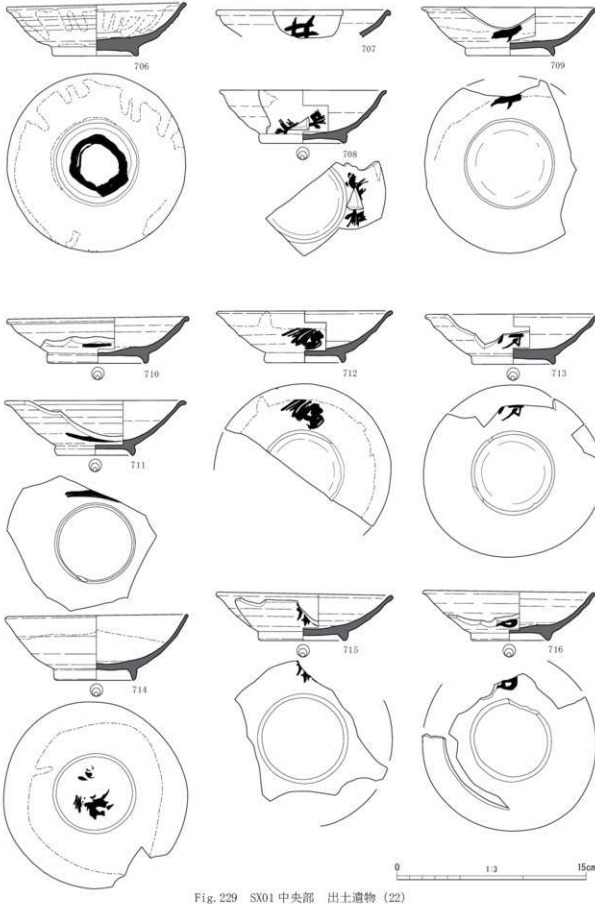

Fig. 229　SX01 中央部　出土遺物（22）

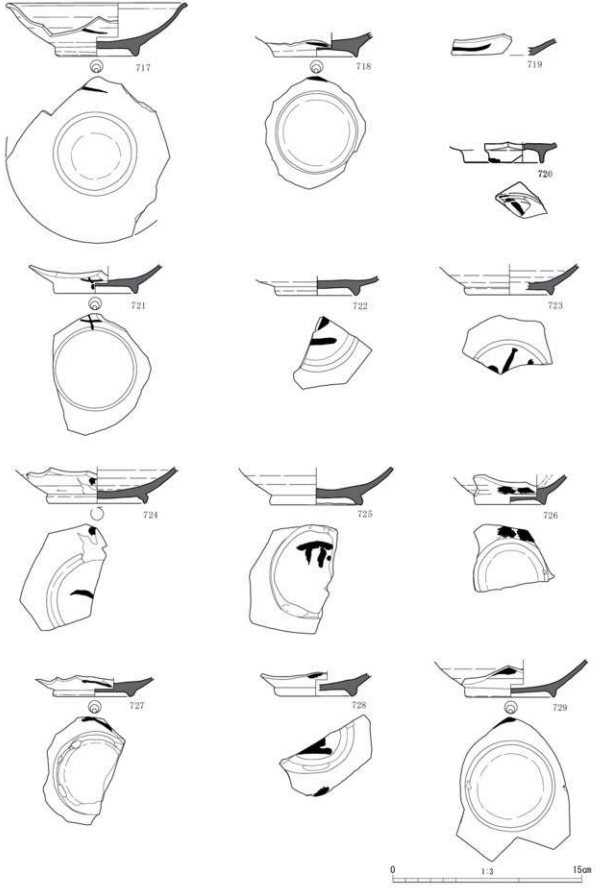

Fig. 230　SX01 中央部　出土遺物（23）

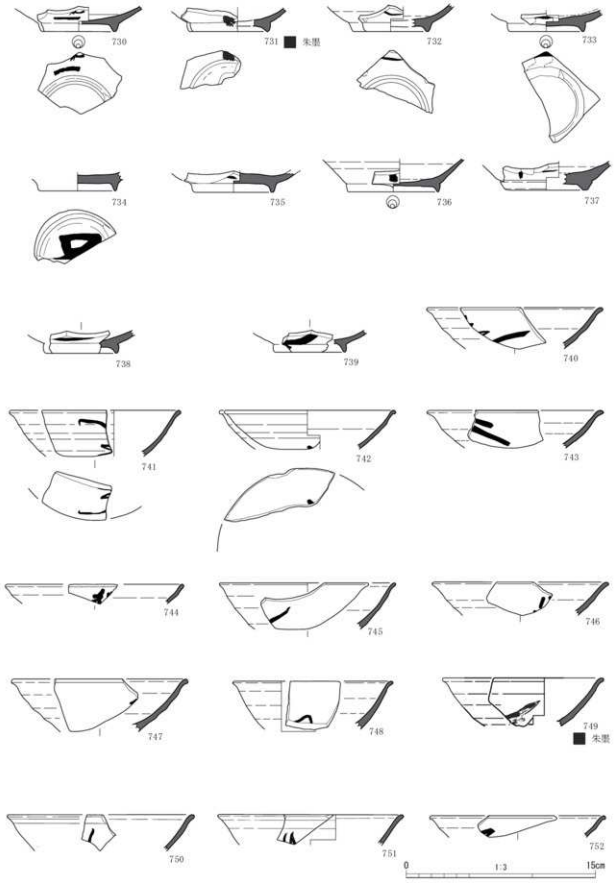

Fig.231　SX01 中央部　出土遺物（24）

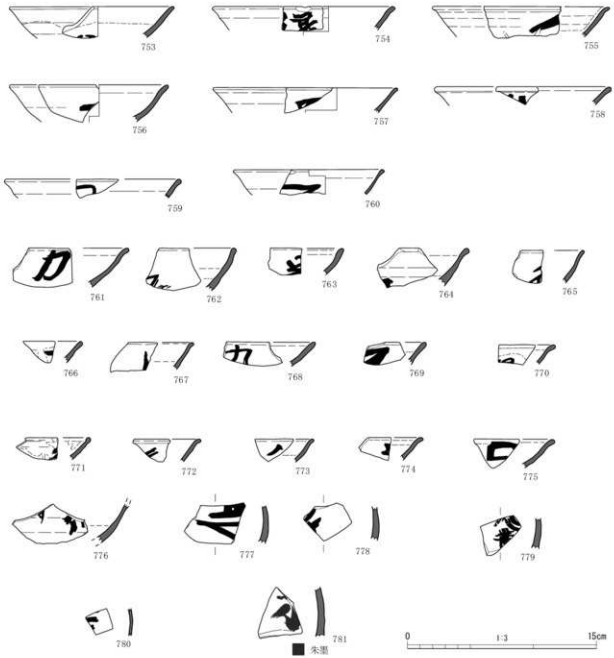

Fig. 232　SX01 中央部　出土遺物（25）

は底部に、663 は内面底部にそれぞれ記されている。664 ～ 666 は碗の体部に「有」が記されている。664 は欠損により不明瞭であるが「有」と考えられる。667 ～ 672 は碗の体部に「平」が記されており、670 は朱墨で記されている。672 は体部 4 箇所に陰陽道に関連したセーマン記号の可能性がある記号が確認される。673・674 は碗の体部に「加」が記されており、674 は逆位で確認される。675 は碗の体部に「二加」が記されている。676 ～ 678 は体部に「本加」が記されている。675 ～ 677 は碗で、678 は皿である。679・681 は碗に「西」が記されている。679 は体部、681 は底部にそれぞれ記されている。680 は体部に「西」と考えられる文字が記されている。682・683 は碗に「寺」が記されている。682 は底部、683 は内面底部にそれぞれ記されている。683 は底部に墨書が

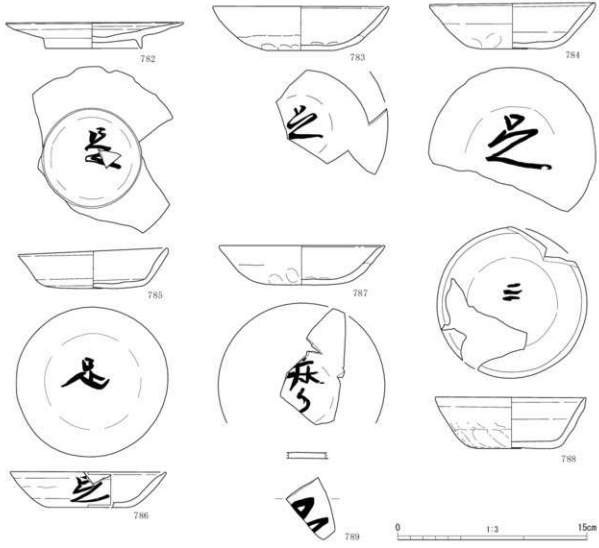

Fig. 233　SX01 中央部　出土遺物（26）

記されているが判読はできなかった。684・685 は碗の体部に「罡」が記されている。685 は２文字確認されるが２文字目は判読できない。

686 ～ 697 は墨書として認識できるが文字が不明瞭なものを示す。686 は「平」、687 は「得上上」、692 は「十万」、694 は朱墨で「足」、697 は「西」と考えられる。698・699 は底部に「寺」と考えられる文字のほかに、別の墨書が確認されるが判別はできない。700 は碗の体部に横位で「平」のほか、「加」と考えられる文字が記されている。701 は碗の体部に横位で「六」のほか、「万」と考えられる文字が記されている。702 は碗の体部に横位で「財」と考えられる文字と「入」が記されている。703 は碗の体部に正位で平行して「平」と考えられる２文字が記されている。704 は碗の底部に２文字確認できるが「弥」のみ判読できる。705 は碗の体部及び底部に墨書が確認できるが判読はできない。706 は碗の底部に墨書による円状の記号が確認される。707 は碗の体部に墨書で井の記号が確認される。708 は碗の体部に横位で「本」のほか「加」と考えられる文字が記されている。709 は碗の体部に「平」と考えられる文字が記されている。711 ～ 795 は墨書と認識できる

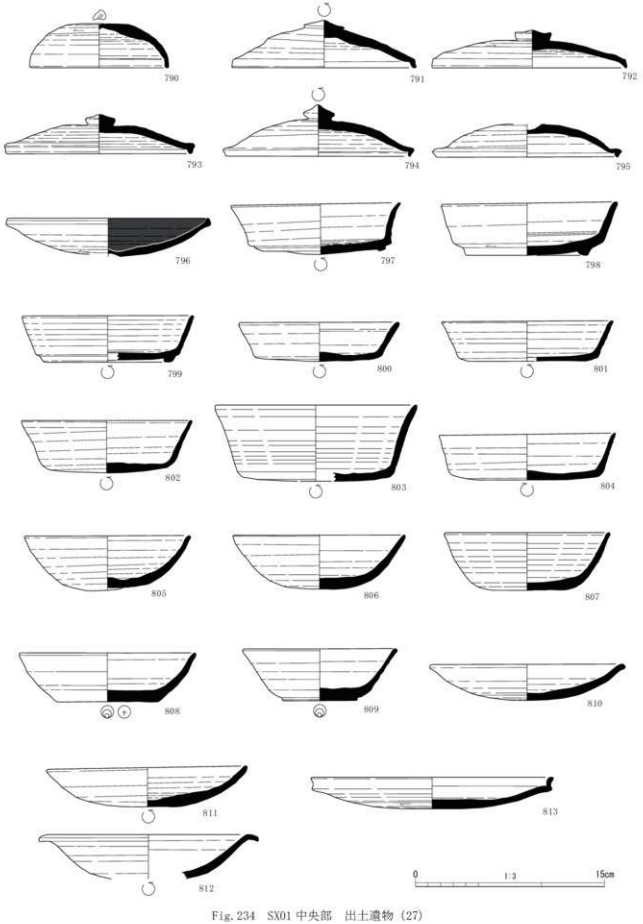

Fig. 234　SX01 中央部　出土遺物（27）

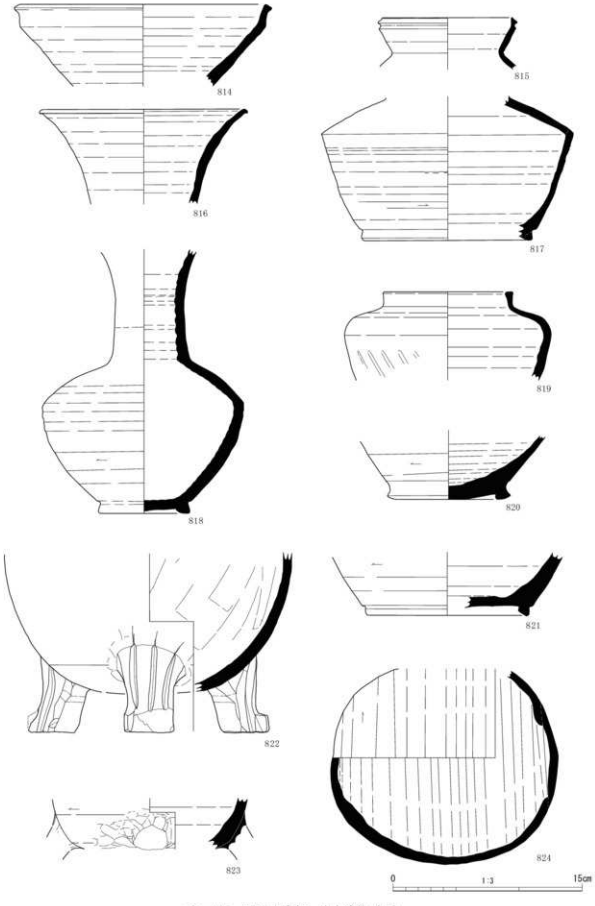

Fig.235　SX01 中央部　出土遺物（28）

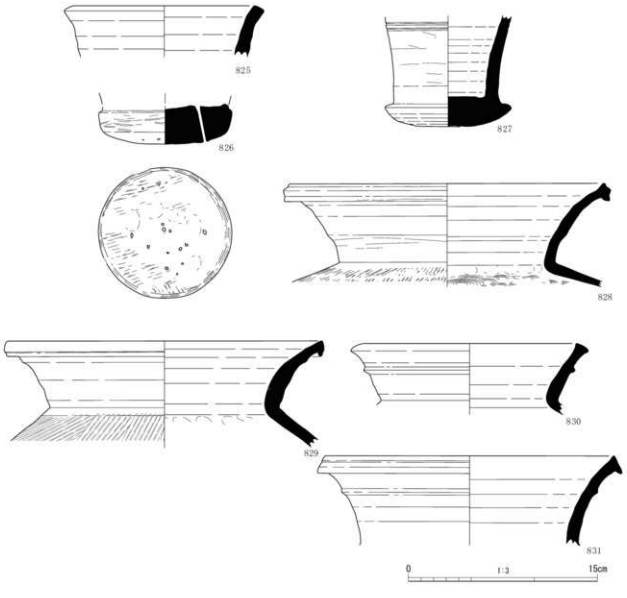

Fig. 236　SX01 中央部　出土遺物（29）

が判読できない灰釉陶器を示す。712 は碗の体部に不明瞭であるが「足」と考えられる文字が記されている。713 は碗の体部に欠損により判読は難しいが「得」が記されている。欠損により判読は困難であるが、740・777 は「足」、754 は「得」、768 は「有」の可能性が高い。781 は朱墨で文字が記されている。

782 ～ 788 は土師器に墨書が記されている。782 は有台皿の底部に「足」が記されている。783 ～ 789 は坏で 783 ～ 785・789 は底部に、786 は体部にそれぞれ「足」が記されている。787 は坏の底部に墨書が 2 文字記されているが判読できない。788 は坏で内外面ともに赤彩が施されており、内面底部に「川」と考えられる墨書が記されている。

須恵器（Fig. 234 ～ 236）SX01 中央部より出土した 790 ～ 831 を示す。器種は、摘蓋、有台坏身、箱坏、無台碗、皿、鉢、壺類、横瓶、陶臼、甕、などが出土している。特に、出土例が少ない獣足壺が出土している。灰釉陶器、土師器と比較して出土数はやや少ない。

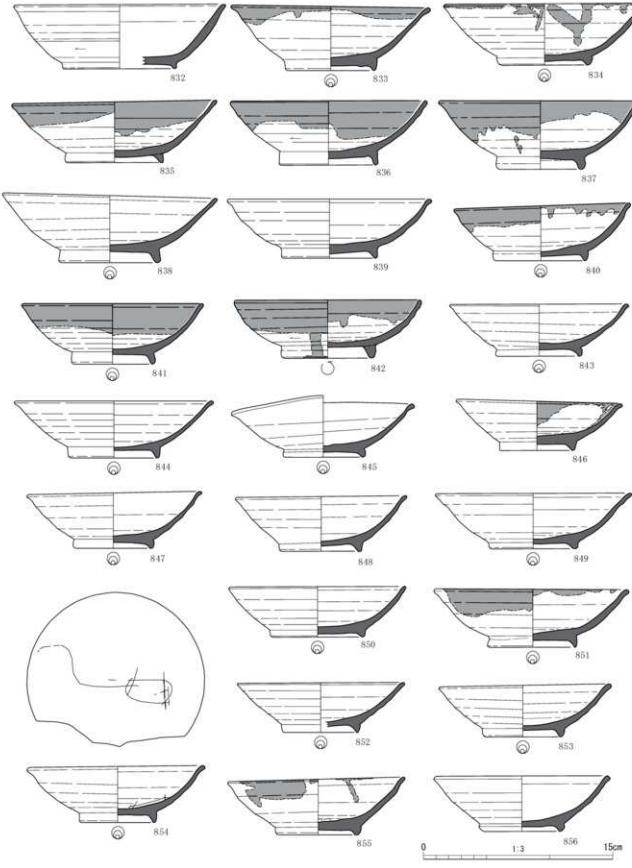

Fig. 237　SX01 中央部　出土遺物（30）

Fig. 238　SX01 中央部　出土遺物（31）

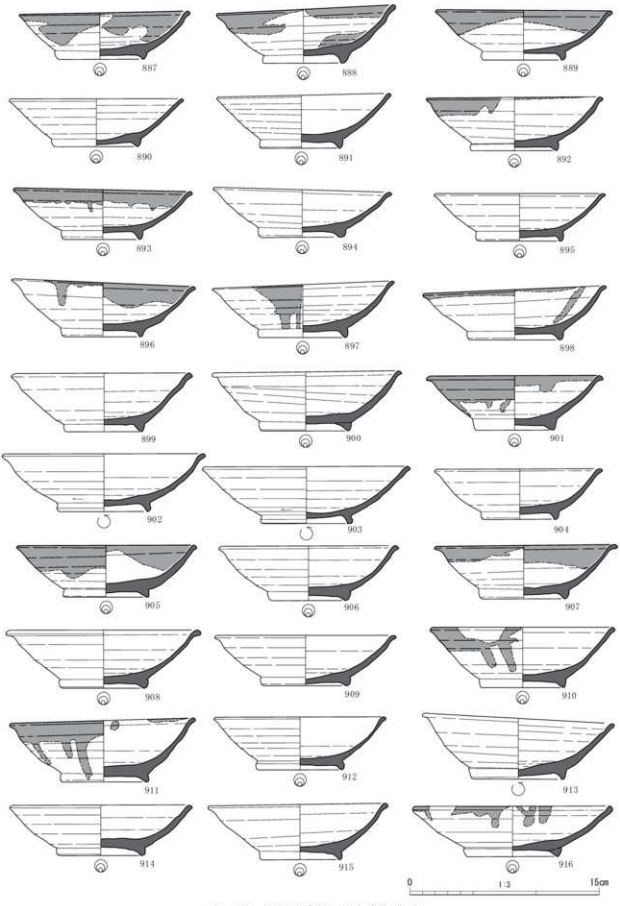

Fig.239　SX01 中央部　出土遺物（32）

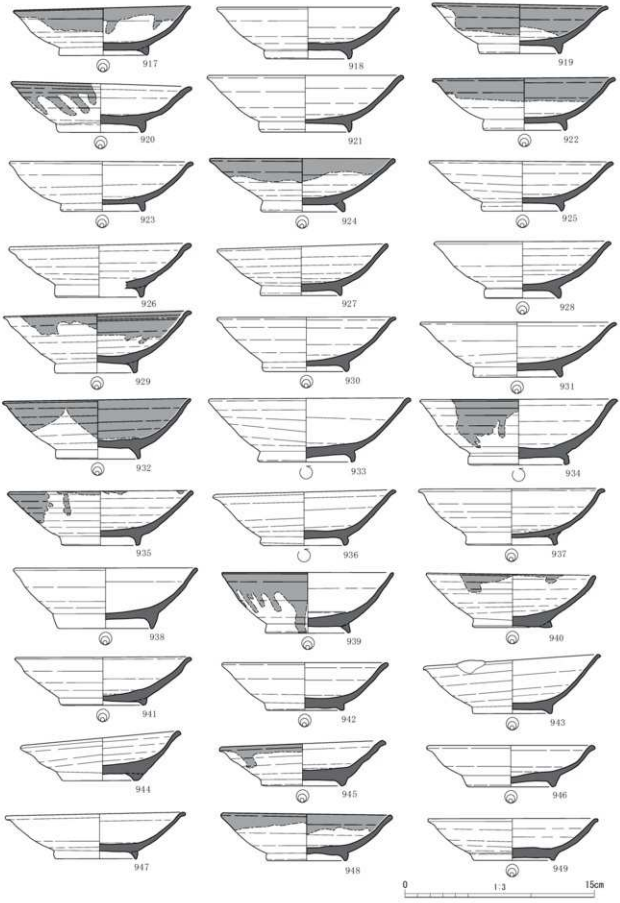

Fig. 240　SX01 中央部　出土遺物（33）

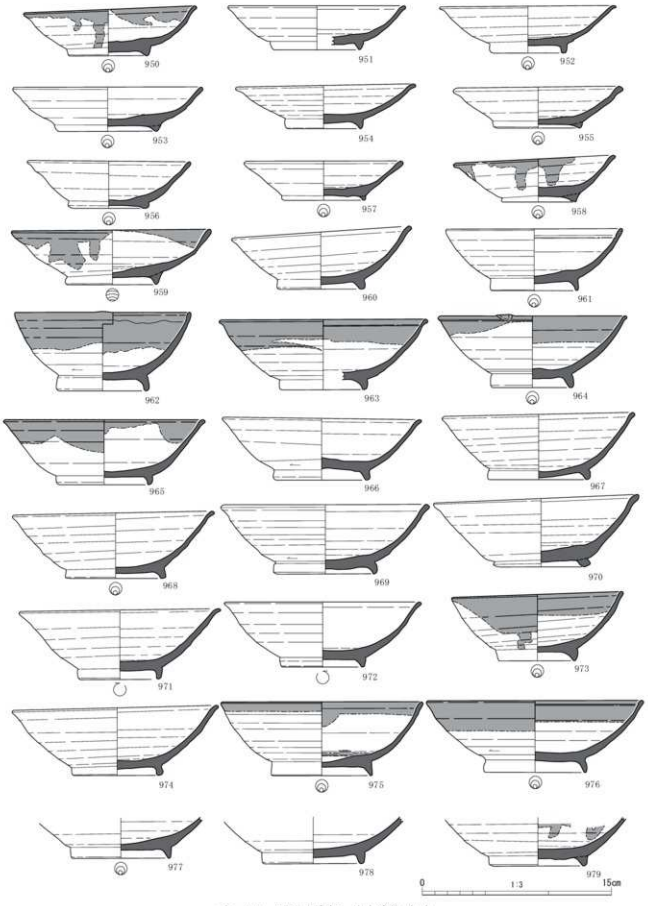

Fig.241　SX01 中央部　出土遺物（34）

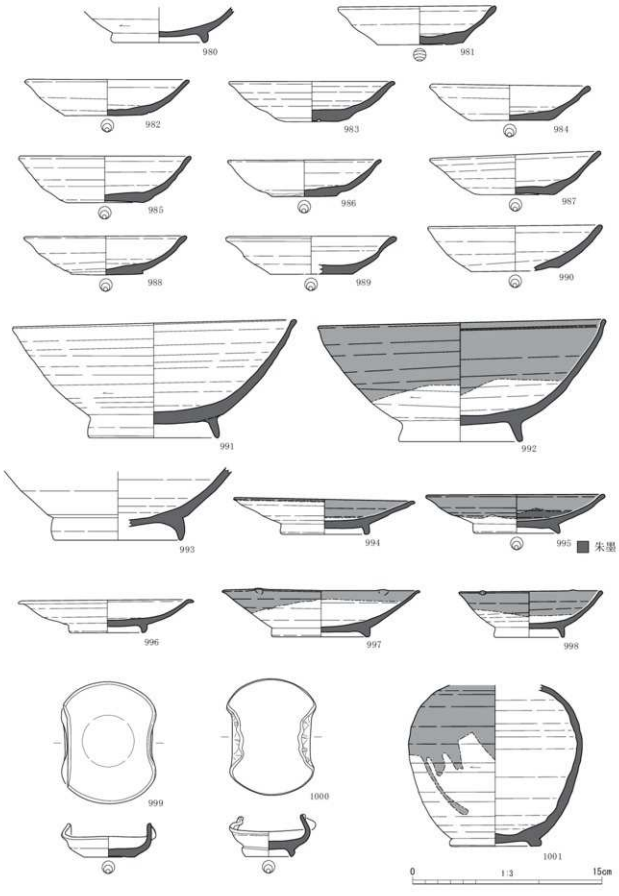

Fig. 242　SX01 中央部　出土遺物（35）

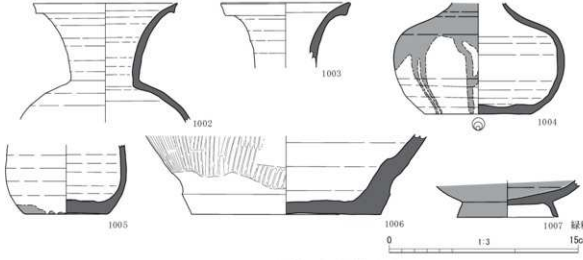

Fig. 243　SX01 中央部　出土遺物（36）

790 は坏蓋である。Ⅶ層からの混入品とみられる。791 ～ 796 は摘蓋である。794 は宝珠型の摘部が高い形状であるため新手の様相を示す。796 は内面全体に墨痕がみられ、また摩耗していることから転用硯と考えられる。797 ～ 799 は有台坏身である。797 は底部が高台より突出した形状である。800 ～ 804 は箱坏である。803 はほかと比較して器高が高い。805 ～ 807 は無台碗である。807 は底部がやや平坦である。808・809 は糸切碗である。808 の底部にはヘラ記号が確認される。810 ～ 812 は皿である。812 は口縁部が外反する形状である。813 は盤である。814 は鉢である。

815 ～ 823 は壺類を示す。815 ～ 817 は広口壺である。815 は口縁部のみ残存しており、不明瞭であるが形状により広口壺と考えられる。口縁部に沈線が確認される。816 は口縁部のみ残存している。817 は口縁部が欠損しているが、体部の形状により広口壺と考えられる。818 は長頸壺である。819 は短頸壺である。外面体部に等間隔で斜めに沈線が確認される。820・821 は壺の底部である。822・823 は獣足壺である。822 は 1 脚のみ残存していたが、体部の残存状態から、3 脚存在していたと考えられる。823 は脚部が体部から剥離している。824 は横瓶で、口縁部が欠損している。825 ～ 827 は陶臼である。826 は底部に不規則な穿孔が確認される。828 ～ 831 は甕である。828・829 は外面にタタキ調整がなされる。830・831 は口縁部中央に突帯が確認される。

灰釉陶器（Fig. 237 ～ 243）SX01 中央部より出土した 832 ～ 1006 を示す。なお、970 は須恵器の有台碗の可能性もある。832 ～ 980、991 ～ 993 は碗である。施釉方法や高台の形状、底部の痕跡など多種多様存在する。832 は高台の断面が四角形であり、底部は欠損により不明瞭であるがヘラケズリと考えられることなど、形状に特徴がみられ 9 世紀前半（K 14 窯式）のものと考えられる。施釉は確認されない。854 は内面に線刻が確認される。882 は外面のナデが乱れる部分が確認されており、内面には詳細は不明であるが繊維状のものによると推定される圧痕が確認される。状態から意図的に施されたとは考えにくい。959 は底部に静止糸切痕が確認される。991 ～ 993 はほかの碗と比較して大型の碗で高台が高い形状である。981 ～ 990 は無台碗で底部はすべて糸切未調整である。981 は底部に静止糸切痕が確認される。994 ～ 996 は皿である。995 は内面全体に朱墨痕が確認される。997 は輪花皿、998 は小型の輪花碗である。999 は無台の耳皿で、1000 は有台の耳皿

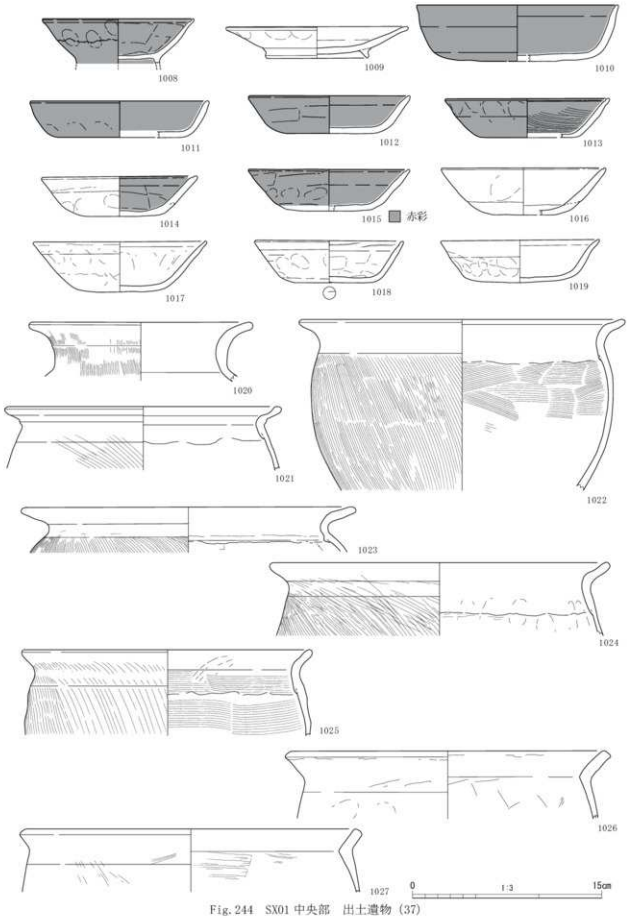

Fig. 244　SX01 中央部　出土遺物（37）

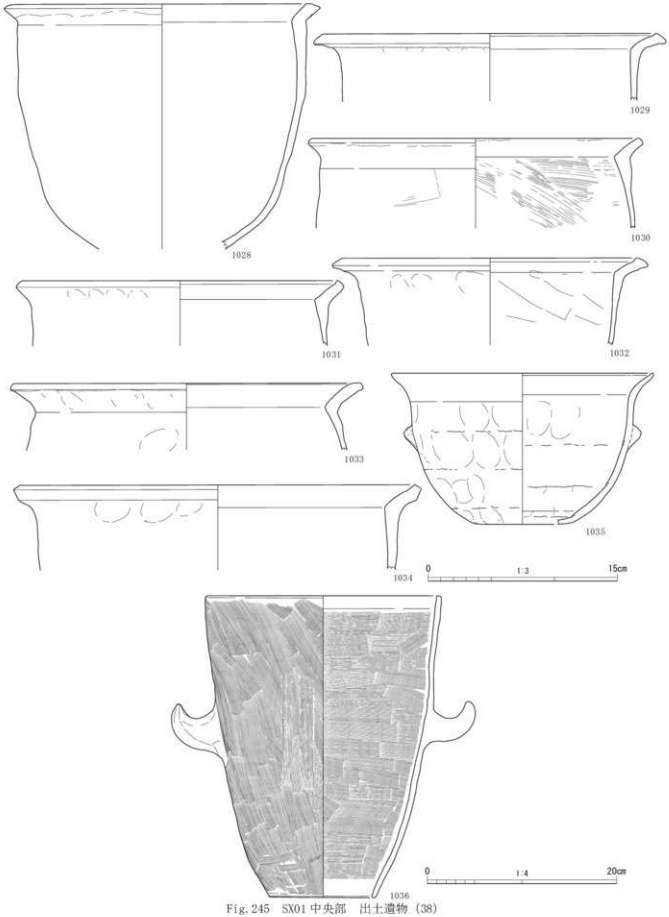

Fig.245　SX01 中央部　出土遺物（38）